

袋井市駅前第二地区土地区画整理事業

七井ノ苑圃調査報告書 4

平成13年度

掛之上遺跡区・X

— 本文編 —

20-02

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

平成13年度

掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ

－ 本文編 －

2002

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課



(1) 銅鐸破片出土状況



(表)



(裏)

(2) 銅鐸破片 (原寸大)

例 言

1. 本書は、平成13年度に袋井市教育委員会と袋井市役所建設経済部区画整理課が実施した、^{おけのうえ}掛之上遺跡の第9・10次発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査に係る事務については、袋井市役所建設経済部区画整理課駅前推進係が行った。特に、駅前推進係の白井正彦、松井一己、兼岡正利、松井純二、渡邊規恵の各氏には、現場と事務に関して円滑な調整をして頂いた。ここに記して感謝いたします。
4. 本書の編集と執筆は松井が行った。
5. 本書に使用した遺構の実測図は、株式会社アジヤマが行った写測図を使用したものであるが、土層断面図や遺物出土詳細図等については松井が作成した。なお方位については、国土座標真北を使用している。
6. 本書に使用した遺物の写真は、松井が撮影したものを使用した。
7. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 本発掘調査は静岡県教育委員会教育長より袋井市長あて「埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（教文第2-51号・平成11年6月8日付け）の指示によるものである。
9. 本書作成のため以下の機関・方々から資料の提供やご協力を賜った。（敬称略）
池谷信之 伊藤寿夫 大谷宏治 漆畑 稔 川江秀孝 木戸雅寿 栗原雅也 鈴木俊則 難波洋三
服部芳人 竹田憲治 向坂綱二 山本恵一 山橋雅美 吉成承三 沼津市埋蔵文化財センター
大仁町教育委員会 浜松市博物館 方形周溝墓研究会の方々

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	2
第3章 掛之上遺跡と弥生時代の周辺遺跡の様相	3
第4章 第9次発掘調査の遺構と遺物	5
1. 遺構	5
竪穴住居	5
掘立柱建物	5
方形周溝墓	6
土坑	7
溝列	7
溝	7
柱穴・銅鐸破片出土小穴・土器集中	8
2. 遺物	22
縄紋時代の遺物	22
弥生時代～古墳時代初頭の遺物	22
古墳時代の遺物	22
奈良時代以降及びその他の遺物	23
第5章 第10次発掘調査の遺構と遺物	35
1. 遺構	35
竪穴住居	35
掘立柱建物	35
土坑	35
溝	36
柱穴群	36
2. 遺物	41
縄紋時代の遺物	41
弥生時代～古墳時代とその他の遺物	41
第6章 掛之上遺跡出土の銅鐸破片・耳環の科学分析	46
1. 耳環の分析	46
2. 銅鐸破片の分析	47
第7章 まとめ	51
1. 弥生時代中期集落の様相	51
2. 弥生時代後期集落の様相	52
3. 古墳時代集落の様相	52
4. 奈良時代集落の様相	53
5. 第9次発掘調査出土の銅鐸の破片について	58

挿 図 目 次

第1図	第9・10次発掘調査地区位置図	4
第2図	第9次発掘調査土層図	9
第3図	第9次発掘調査全体図	11・12
第4図	S B 1～3実測図	13
第5図	S B 4～6・S X 2実測図	14
第6図	S H 1・S Z 2・S A 1実測図	15
第7図	S H 2～4実測図	16
第8図	S Z 1・5実測図	17
第9図	S Z 3・S Z 5土器1実測図	18
第10図	S Z 4実測図	19
第11図	S K 1～6実測図	20
第12図	S K 7～10・銅鐸ビット・S P 245実測図	21
第13図	土器実測図1	24
第14図	土器実測図2	25
第15図	土器実測図3	26
第16図	土器実測図4	27
第17図	土器実測図5	28
第18図	土器実測図6	29
第19図	土器実測図7	30
第20図	土器実測図8	31
第21図	土器実測図9	32
第22図	土器実測図10・金属製品・石製品実測図1	33
第23図	金属製品・石製品実測図2	34
第24図	第10次発掘調査土層図	36
第25図	第4・7・10・11次発掘調査全体図	37・38
第26図	S B 11・12・S H 8・S K 39・45実測図	39
第27図	S K 38・40～42実測図	40
第28図	土器実測図1	42
第29図	土器実測図2	43
第30図	土器実測図3	44
第31図	土器実測図4・石製品実測図1	45
第32図	掛之上遺跡出土の耳環・銅鐸片のスペクトル・鉛同位体比分析図	50
第33図	第9次発掘調査遺構変遷図1	54
第34図	第9次発掘調査遺構変遷図2	55
第35図	第1・4・7・10・11次発掘調査遺構変遷図1	56
第36図	第1・4・7・10・11次発掘調査遺構変遷図2	57
第37図	掛之上遺跡及び県内銅鐸破片集成図	59

写真図版目次

巻頭カラー (1) 銅鐸破片出土状況 (2) 銅鐸破片

図版1 第9次発掘調査出土遺物写真(1) 土器

図版2 第9次発掘調査出土遺物写真(2) 土器

図版3 第9次発掘調査出土遺物写真(3) 土器・金属製品

図版4 第9次発掘調査出土遺物写真(4) 石製品

図版5 第10次発掘調査出土遺物写真(1) 土器・石製品

掛之上遺跡第9・10次発掘調査報告書

第1章 調査に至る経過

袋井市高尾地内に所在する掛之上遺跡は、昭和49年7月～12月に「中遠広域都市計画事業袋井駅前地区土地区画整理事業並びに中遠広域都市計画道路の建設」に関連して、掛之上地区に所在していた周知の埋蔵文化財である狐塚古墳が発掘調査の対象となり、狐塚古墳発掘調査委員会が組織され、川井正一氏（当時袋井市教育委員会）を担当者として調査を実施したのが第1次発掘調査となった。

第1次発掘調査の後、昭和57年に個人住宅建築（第2次発掘調査）、昭和63年に袋井駅前地区土地区画整理事業に伴う道路部分（第3次発掘調査）、平成9年に原野谷川護岸改修工事（第4次発掘調査）に係る発掘調査が実施された。第2次と第3次発掘調査については袋井市教育委員会、第4次発掘調査は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所により実施された。

今回の掛之上遺跡第9・10次発掘調査は「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査であり、関連の発掘調査はまず平成9年5月16日～5月21日に永井義博氏（袋井市教育委員会）の担当により試掘調査が実施された。この調査では26箇所の試掘グリッドを設定し、遺跡の範囲確認を行ったところ、概ね掛之上地内のほとんどの埋蔵文化財が所在することが判明した。

この試掘調査の結果から本調査に取り掛かるため、平成11年5月6日付で袋井市長豊田舜次名（袋井市役所区画整理課）で文化庁長官宛てに「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法57条の3の規定）が提出された。これを受けて平成11年6月8日付の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文第2-51号）の通知が、静岡県教育委員会教育長杉田豊名で袋井市長宛て送付され、区画整理事業着手前の発掘調査が正式に指示された。

「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に伴う本調査は、第1回目として平成11年度に永井義博氏を担当者として、遠州中央農業協同組合袋井南支店の移転に伴う建物建設予定地分（第5次発掘調査）、平成12年度においては南支店の設計内容の変更や周辺地下工事のための追加の発掘調査（第6次発掘調査）、小野田柳原線に伴う発掘調査（第7次発掘調査）が実施された。

「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」の発掘調査については、主に都市計画・区画道路と宅地造成部分が調査の対象となることが明らかとなった。道路分については、歩道がつく客員幅17mの幹線道路と、歩道部分のない客員幅6mの区画道路に別れる。今回の第9次発掘調査については区画道路6号線、第10次発掘調査は区画道路1号線建設に係わる発掘調査であるため、いずれも幅6mの細長い調査区画となった。平成13年度の発掘調査は他に農協袋井南支店の駐車場部分についても整地工事が深くなり遺構面を削平することが判明したために発掘調査（第8次発掘調査）が実施されたほかに、小野田柳原線に伴う発掘調査（第11次発掘調査）や特殊道路1号線（第12次発掘調査）など第8～12次の合計5件の発掘調査が実施された。また、個人住宅の基礎部分や幅の狭い側溝など小規模な埋蔵文化財の破壊に伴う事業については立ち会い調査を行ってきているが、平成13年度で7件になりこれについてもかなりの件数になってきている。今後の「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に係わる発掘調査や立ち会い調査は、次年度以降事業のかなりの進捗が予想され増加してくるものと考えられる。

第2章 調査の経過

今回の発掘調査は既存の道路部分は第9次発掘調査地区西端部分を除いてほとんどないため、廃土置場の方法と西端の迂回路をどうするか程度が検討課題となった。効率的な発掘調査を行うためには隣地に廃土置場を確保することが最善と考えられた。第9次発掘調査については、まず5月から実際にどのくらい調査の範囲が必要となるかの検討を行い、部分的な調査と準備を6月までに事前に進めて、本格的な調査は7月から行うことにした。第9・10次発掘調査は共に道路敷地の調査であるが、排土置場を隣地に確保することができたため調査区を分割して調査する必要はなくなったが、迂回路の確保のために第9次発掘調査地区西端部分については調査区をわけて発掘作業を進めることにした。また、第9・10次発掘調査地区は共に現況は畑地であったために、一部を除いて包含層の残存状況は良好であった。よって表土の除去は、基本的には重機にて包含層上面まで掘削することに留めた。

第9次発掘調査では区画道路6号線分の総面積480㎡、幅6mの狭い調査区であった。畑地部分下については表土の除去のみに留め、包含層は人力にて掘下げを行えるだけ遺物の採集に努めた。平均30cmの厚さの包含層中の遺物は毎日整理用ケース1～2箱が出土するほど、多量なものであった。遺物の主体は弥生時代後期の土器と古墳時代後期の土器であった。しかし、少量ではあるが、鎌倉～戦国期の陶磁器類も含まれていた。包含層の掘削は8月までであった。なかでも銅鐸の破片が出土したことは銅鐸の分布の東の限界を考えるうえで注目された。平行して遺構の調査も進めたところ、弥生～奈良時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物4棟、欄干1、方形周溝墓4基が検出された。弥生時代後期末の溝に囲まれた掘立柱建物の発見は、付近からの銅鐸の破片の出土と共に考えると、弥生時代から古墳時代への時代の変化を考えるうえで貴重な発見となった。7～8月は例年でない猛暑に襲われ、作業員の熱中病対策を考えつつ作業を進めた。8月末～9月の雨天で多少の遅れはあったものの、全体の作業は順調に進み9月中旬には写真測量と写真撮影作業を終了した。その後、迂回路部分である西端部分の調査を完了し、第9次発掘調査は9月末にはすべて完了した。

区画道路1号線分の発掘調査については11月末からの調査となったために、10～11月については一次的に発掘調査が中断することになった。第10次発掘調査は中断期間の後、11月末より開始した。発掘調査区は畑地であったが、北側半分は茶畑の部分で改植が遺構確認まで及び包含層の残存状況が悪かったが、それ以外の部分については畑地であったため包含層の残りは良かった。よって、北半分については重機にて遺構確認まで表土の掘削をしたが、南半分の畑地部分下については表土のみの掘削に留め包含層の調査についてはできるだけ遺物の採集に努めた。包含層中の遺物は整理用ケース5箱が出土し多量なものであった。遺物の主体は弥生時代後期の土器と古墳時代後期の土器であった。平行して遺構の調査も進めたところ、弥生時代後期を主体とする竪穴住居1棟やまとまって土器が廃棄された土坑2基、古墳時代後期の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟なども見つかり、遺構の密度は隣地の第7次発掘調査と同じくらい高いものであった。遺構密度は高いものであったが、調査区の面積は110㎡と狭かったこともあり、全体の作業は順調に進み12月中旬には写真測量と写真撮影作業を終了し、第10次発掘調査の作業はすべて完了した。

その後も、特殊道路1号線の調査を3月上旬に行うなど予想外の作業が加わるなどしたため、資料整理と報告書の作成時間が取れない事態に直面したが、関係者の驚異的なご努力でなんとか道路工事も終わり、現地発掘作業と平行して内業の整理作業も進めてきたため、本報告書の作成もできる限りの内容でなんとかまとめ刊行することができた。

第3章 掛之上遺跡と弥生時代の周辺遺跡の様相

掛之上遺跡は過去の調査の状況で、縄文時代～中・近世に至る歴代の袋井市有数の遺跡であることが判明してきている。今回は弥生時代と古墳時代後期の遺構・遺物が見つかることができたため、付近の弥生時代の遺跡について概観してみたい。

弥生時代前期～中期前葉については、掛之上遺跡での様子についてはほとんど分からない。周辺の遺跡についても、前期～中期前葉に関する遺構・遺物が見つかった例はほとんど見受けられない。

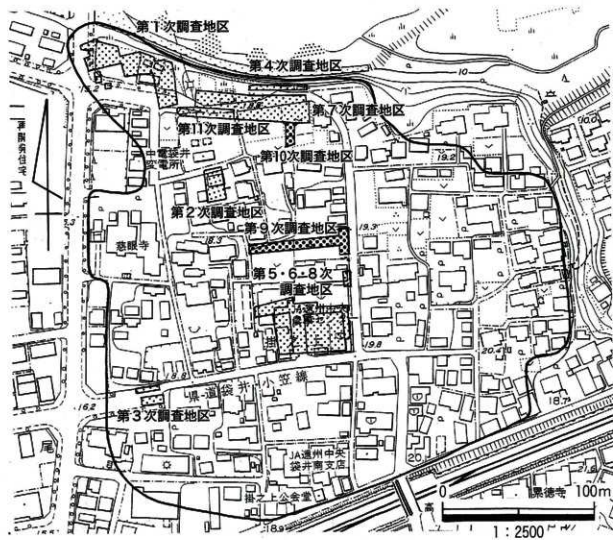
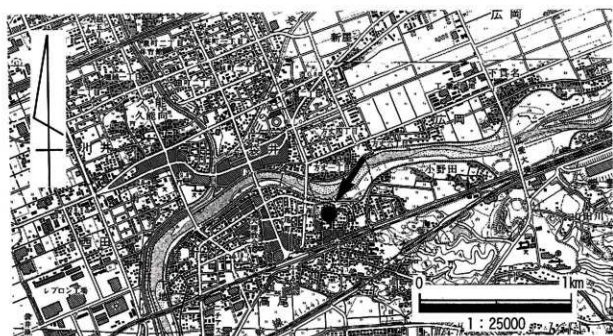
弥生時代中期中～後葉になると、掛之上遺跡でも遺構数が格段に増加してくる。今回の第9次発掘調査地区を始めとし、第1～3・5・6次発掘調査地区で中期中～後葉の方形周溝墓群、方形周溝墓群に隣接して第7・9次発掘調査地区で堅穴住居が見られ、同時期の大門遺跡を含めると非常に広大な遺跡の広がりを見せる。掛之上遺跡では遺跡の西半分が墓域、東半分が居住域となり、墓域と居住域が隣接していることが判明し、居住域は環濠集落にはならないと思われる。

掛之上遺跡に隣接する大門遺跡では方形周溝墓1基のみの発見で、大門遺跡の墓域としては掛之上遺跡と同様に遺跡の西半分に墓域があるか、南側の谷部（旧笠西池）をはさんで南側の丘陵に展開する総数100基近い中期中～後葉の方形周溝墓群が発出された団子塚遺跡に墓域を想定することができる。すると、掛之上・大門遺跡の墓域は2箇所あり、広大な墓域を保有する中期集落の実態が明らかになりつつあると考えられる。

弥生時代後期ではさらに飛躍的に遺構の数が増大し、第1・6次発掘調査地区で方形周溝墓が、第2・3・6・7・9・10次発掘調査地区で住居跡や土坑が発出され、掛之上遺跡内では墓域と居住域が比較的隣接して位置することが判明してきている。大門遺跡では今のところ、後期の堅穴住居がかなり密集して発見されているため、中期から引き続き掛之上遺跡と同一の居住域になることが判明している。墓域は未発見であるが、遺跡の西側に存在するかもしれない。

さらに、中期までは掛之上・大門遺跡の墓域と考えられている団子塚遺跡に中期の墓域と重複して後期の集落が出現し、中期段階で墓域でない地区の北原遺跡にも集落が営まれるようになった。団子塚・北原遺跡の墓域は、居住域からやや離れた高尾向山Ⅱ遺跡で方形周溝墓が発見されているため、隣接してそれぞれ墓域をもつ拠点的な集落である掛之上・大門遺跡から団子塚・北原遺跡が分付して出現したと理解される。

このように、掛之上・大門遺跡を中心とする後期の集落規模の拡大は、太田川水系では下流域の低地における十二所遺跡群、鶴松遺跡群の形成、掛川市域を中心とする和田岡丘陵遺跡群のような、丘陵地への後期集落の進出、拡大などの現象と同一なものと理解される。特に中遠地域では、河川規模が小さく結果沖積平野が狭いことから平野部の自然堤防等の微高地の発達が少ないため、掛之上・大門遺跡のような台地や、愛野向山遺跡のような丘陵性の遺跡が非常に多く見られる。なかには、袋井市一色前田遺跡、掛川市八景山遺跡、森町片瀬城遺跡のように環濠をもつ高地性集落が知られているが、大多数の遺跡では環濠を保有する丘陵性の集落は少ない。掛之上・大門遺跡でも後期段階の確実な環濠については現在未発見である。平野部では鶴松遺跡などで環濠らしい溝が見られるが、まだまだ確認数は少ない。さらに、西遠江の後期集落のほとんどが環濠集落になる可能性があることから見ると、中遠地域の後期環濠集落の少なさが対照的で、西遠の山中・欠山式土器、中・東遠の菊川式土器の南関東への伝播の問題とともに、重要な検討課題となっている。



第1図 第9・10次発掘調査地区位置図

第4章 第9次発掘調査の遺構と遺物

1. 遺 構

今回の調査区の包含層は畑地であったことから保存は良好で、調査区中央部で40cm、東端では20cmと厚・薄があるが、平均30cmの弥生～古墳時代後期の包含層が20～30cmの表土の下に存在した。

竪穴住居（SB）

竪穴住居は弥生時代中～後期のSB1・2・6と、古墳時代後期のSB3・4が検出された。ほかにもSK1なども竪穴住居の一部になる可能性が考えられる。また、竪穴住居のほとんどすべては、床面が包含層と地山面の境に営まれ、あまり地山面を深く掘り込まない状況から、本調査区東半分に検出された多数の柱穴群の中に竪穴住居の柱穴が含まれている可能性は充分考えられる。

弥生時代の竪穴住居の平面形は長楕円形を呈するSB1・2・6のみが検出された。何れも住居の全体が検出されていないため、正確な平面形態と建物規模は分からない。楕円形のSB1・2はともに建て替えが認められ、SB2の建て替えは3回にも上るものである。当地域の弥生時代竪穴住居の平面形の変遷（松井一明 1992）によると、長楕円形は中期後葉～後期前半にかけて良く見られる形態である。SB2からは唯一時期の決定できる土器が出土しているものの、埋土中より中期後葉～後期の土器が混在し明確な時期は押さえられない。しかしながら、おそらく埋土のなかに中期後葉の土器が一定量含まれているので、中期後葉に遡る可能性が高い住居と考えられる。主柱穴はSB2で一箇所確認できたが両住居ともほとんど調査区外になるため、炉の位置や柱の配置等の構造は分からない。SB6についても炉や主柱穴等が全く検出されないため、時期や構造については不明と言わざるを得ない。今後周辺域の調査を待って検討を要する。

古墳時代の竪穴住居は方形プランで細い壁溝をもち普通サイズのSB3、小型のSB4の2棟が確認された。該当時期については、何れも床までの埋土が浅く出土遺物が少ないことから明確な時期は特定できないが、出土土器からはSB3については坂尻Ⅰ-3式段階（陶邑TK43段階 松井一明 1995）、SB4については坂尻Ⅰ-4式段階（陶邑TK209段階）に該当すると考えたい。かまどについては、SB3の北側の壁で確認できた。平面では良くわからなかったが、横断面を見ると砂質の土が両側縁に認められるため、砂質土をかまどに使用していたことが分かる。SB4については住居の全体を確認できたが、かまどは認められなかった。他の調査区でも小型住居にはかまどを設置されない傾向が認められることから、かまど付住居とは異なる性格の竪穴住居とも考えられる。柱の配置はいずれも4本の主柱穴をもつと考えられる。貯蔵穴と思われる方形土坑がSB3で確認された。北壁に設置されたかまどの東脇に確認でき、当地域での一般的な位置に認められる貯蔵穴である。

掘立柱建物（SH）

掘立柱建物は弥生時代中～後期の墓域とならない調査区東半分からSH1・4の2棟、墓域内である調査区西半分からSH2・3の2棟、合計4棟を発見した。とくに、多数の柱穴群が検出できた調査区東半分については、現地でかなり検討してみたものの自信をもって掘立柱建物として報告できる柱穴の組み合わせをSH1・4以外で提示しえなかった。しかしながら、たとえば古墳時代後期の遺物を出土する柱穴を抽出するとSB3の周辺にまとまる傾向があることから、抽出できていない古墳時代後期や弥生時代後期の何棟かの掘立柱建物は存在していたと推測される。

建物型式は、溝で囲まれた建物と思われるSH1は桁行3間、梁行1間以上、SH4については梁行2間、桁行1間以上の総柱建物と推測されるが、全体の建物構造はほとんど調査区外になるため不

明である。溝や柱穴から出土した土器から考えるとSH1は弥生時代後期終末、SH4は古墳時代後期に該当するものと考えたい。SH1については2～3本の柱穴の切り合いが認められるため、ほぼ同じ位置で2～3回の立て替えがなされた建物と考えられる。なお、SH1の周溝(SZ2)内からは、当地域では数少ないA類S字甕や手づくね土器らしい破片が出土している。

古墳時代後期の掘立柱建物は建物配置から見るとSH1と竪穴住居のSB3と組み合わせになりそうであるが、建物の主軸方向微妙に異なる。ただし、このような主軸方向が微妙に異なる掘立柱建物と竪穴住居の組み合わせは坂尻遺跡でも確認されているので、今回は同一単位と報告しておきたい。時期は坂尻I-3～4式段階(6世紀後葉)に該当すると考えておきたい。

SH2・3は調査区を南北方向に横断する建物と思われるが、おそらく建物の一部しか検出できていないため、桁行3間以上、梁行2～3間程度の土間造りの長屋風の建物と考えられる。柱穴から出土する土器からは細片が多く、特に詳細な時期は特定できなかったが、古墳時代後期の土師器破片が出土したこと、柱穴が方形を呈することから奈良時代の建物と考えた。しかしながら、第5・6・8次発掘調査区で検出された奈良時代の総柱の大型掘立柱建物が国土座標方位で東へ10°振れるのに対して、SH5・6についてはほぼ北方向を向くことから奈良時代と確認された建物の主軸方向とは異なるため、確実に奈良時代に該当させることもできない問題点も存在する。柱穴の土層からは径20cm程度の柱痕跡が確認できるものが存在する。しかし、柱の痕跡が確認できないものもあることから、これについては柱の掘方を掘削して抜き取られたものもあると考えたい。

方形周溝墓(SZ)

方形周溝墓は調査区西半分で弥生時代中期のもの、東半分からは古墳時代前期のものが検出されている。何れも調査区が狭いため全体の形状を把握できたものはないことから、認定基数に検討の余地があるが、弥生時代中期の方形周溝墓は3～5号墓の3基、古墳時代は1号墓の1基の合計4基となる。ただし、弥生時代後期末の土器を出土したSZ2とした方形周溝遺構については、SH1とほぼ主軸方向と位置関係が合うこと、溝の四隅がつながりそうになるSZ1や周辺の弥生時代後期の周溝墓とは形状が異なることから、方形周溝墓とは認定せずSH1の周溝になると考えた。

弥生時代中期の3～5号墓の平面形態は、所謂四隅に陸橋をもつ東海・南関東型中期方形周溝墓になると思われる。規模も一边8～9mを測るものがほとんどと推測され、大きさは比較的均等なもので構成されている。それぞれの周溝墓は互いの溝を結合し再利用して構成されるもので、遠江の中期方形周溝墓に特徴的なものである。5号墓東溝では陸橋部分において、溝間を連結すると思われる小溝が確認された。4号墓についてもその痕跡が確認されている。四隅の溝間すべてに連結の小溝が存在するかどうかは、遺構面が削平されているせいかよくわからなかったが可能性はあると思われる。

主体部は4号墓の溝内のみで確認され、墳丘中央部に存在するものは発見されなかった。4号墓の北溝内土坑は長さ2.6m、幅0.6mを測る縦長の長方形の土坑で、祭祀用の土器を壊して設置されていることからある程度溝が埋まってから埋葬された木棺の痕跡と考えられる。土坑の形態から箱型の木棺と推測され、木棺の小口板を設置するための小穴は確認されないことから、小口穴のないI類のなかでも幅の狭い比較的大形の部類に入る伸展葬可能な木棺となりそうである(松井一明 1998)。全ての周溝墓の方台部では埋葬主体は確認できていないことから、少なからず低墳丘の盛土はもっていたものと考えられる。

出土遺物は、各周溝墓の溝内より土器のみが出土している。個別に検討すると、3号墓南溝で口縁部が欠損している壺と上半部がほぼ復元できる壺の土器破片、同東溝で4号墓北溝で上半部がほぼ復元できる壺の土器破片、4号墓北溝で溝内木棺により底部が失われているがほぼ完形であったと思わ

れる壺とほぼ全体が復元可能な壺一個体分の土器破片、5号墓南溝で完形の壺が出土している。器種としては破片を除くとほぼ壺に限られるようで、完形のもの、口縁部欠損のもの、破砕土器があるようであるが、穿孔土器はなかった。何れも中期後葉の白岩式段階のものと考えられるが、5号墓のものは新しい様相、その他は古い様相になるものである。また、小破片ではあるが4号墓北溝出土の壺破片は中期中葉の嶺田式で混入品であるが、付近に中期中葉の方形周溝墓の存在を推定させる。

古墳時代前期の方形周溝墓SZ1は調査区東端で1基確認され、弥生時代中期の墓域とは明らかに異なる場所で、集落域のなかに存在するものと考えられる。全体の平面形態は分らないが検出された範囲で見ると、少なくとも1隅に陸橋もち、1隅も連結するが溝は浅くなっていることから、四隅に陸橋をもつ弥生時代中期以降の方形周溝墓の形態の影響を受けていると考えられる。群溝成については調査区が狭いため良く分からないが、周辺部の調査の様子から見ると弥生時代中～後期の群をなすものとは異なり、単独か散在的に存在するかの何れかであろう。

主体部は検出されなかった。調査区外に存在するのであろうか。

出土遺物は北溝から焼成後底部穿孔の完形の壺が出土している。溝の底ではなくて、溝が一定埋まった段階で土器が置かれていていると考えられる。時期は古墳時代初頭、小山角田Ⅰ-2式(松井一明 1995)の範疇に比定されるものである。

土坑 (SK)

土坑は弥生時代の遺構が多く検出された調査区東半分で多数確認できた。SK4・6・8・9などほとんどが弥生時代後期後半の土器を出土したが、SK2からは遠江Ⅳ-2～3期(7世紀後半)の須恵器、SK7からは遠江Ⅲ-3期(6世紀後葉)の須恵器が出土している。古墳時代後期の土坑については性格については分からないが、多くは塵芥の廃棄土坑であろう。

弥生時代後期の土器を出土する土坑のなかで比較的まとまって土器が出土したのはSK6・8・9であるが、多器種にわたる破損している土器ばかりであるため、土器等の廃棄土坑と考えられる。SK8については3号墓と重複しており、弥生後期後半末段階において中期の方形周溝墓を削平し掘られた可能性を示すもので、銅鐸破片出土の小穴の該当時期を決定するうえで注目される遺構である。

柵列 (SA)

柵列と思われる大形の柱穴5基が、SH1と重複して1列確認できた。主軸方向は、SH2・3がほぼ北方向(国土座標方位)を向けるのとは異なり東に12°振れている。柱内からは時期が決定できる土器は出土していないが、第5・6・8次発掘調査区で検出された奈良時代の総柱の大型掘立柱建物(国土座標方位で東へ10°度振れる)に類似することから、奈良時代の官衙における何らかの区画施設とも考えられる。SH2との新旧関係については良く分からなかったが、SH2・3と類似する第5・6・8次発掘調査区で検出された奈良時代後期～平安時代の長屋風建物は大型の総柱掘立柱建物よりも新しいものであることから、柵列のほうが古くなる可能性が推測される。

溝 (SD)

弥生時代・古墳時代の溝状遺構は古墳時代後期になりそうなSD2・3があるが、何れも短い範囲でしか検出されなかったため、溝の性格については分からない。

今回の調査区で顕著に認められた明確な溝は、主軸が北で南北方向に走る近世溝1、北東方向にのびる近世溝2の2本の溝が検出された。何れも表土から掘込まれていることから、江戸～明治時代の地割溝と考えられるものである。出土遺物は溝2では江戸時代のものに限られるが、溝1については江戸～明治時代のものが出土し大正～昭和の遺物は全く含まないため、おそらく現在の道路ができる以前江戸～明治にかけて機能していた地割溝の可能性が高いと考えられる。特に溝1については現在

の地割と合うこと、複数の切り合いが認められること、溝の規模から考えて重要な地割部分であったと考えらる。溝2について現在の土地割とは合わないこと、出土遺物も江戸時代に限られるため、江戸時代に機能していた地割溝と考えられる。今回の調査地点では近世遺構は地割溝しか検出できなかったが、溝2からは比較的陶磁器が出土しているため、付近に住宅地があったとも考えられる。

柱穴（SP）・銅鐸破片出土小穴・土器集中

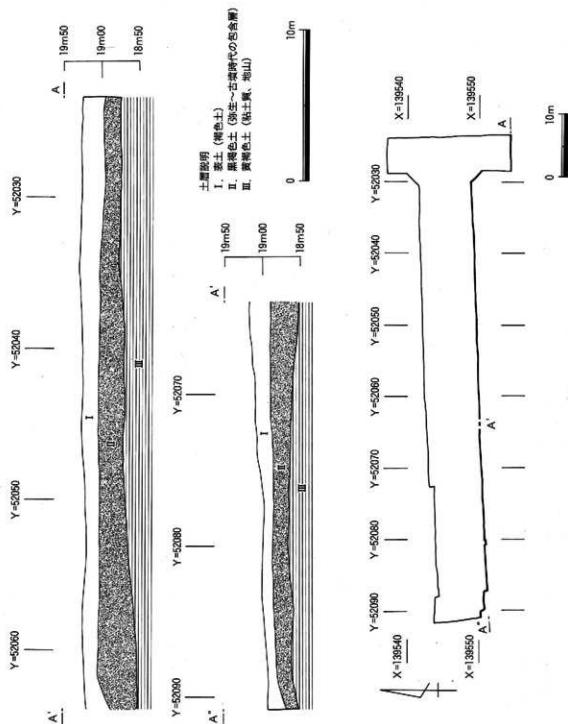
掘立柱建物の柱穴も含めて総数約350基の柱穴が検出できた。分布はまんべんなく検出されているが、弥生時代中期の周溝墓と重複する部分ではやや少ない傾向がある。現在までの周辺部における調査から考えると、弥生時代後期の墓や住居が中期の墓と重複することはほとんどないため、後期の集落は中期の墓を壊さないと考えられている状況と合致する結果であろう。おそらく、本調査地点でも以前の調査と同様に、古墳時代後期に弥生時代の墓を削平して集落域にするため、弥生時代の周溝墓と重なる柱穴については古墳時代後期以降のものであると思われる。

ただし、弥生時代中～後期の集落域の境にある3号墓については異なる状況がでてきている。すなわち、周溝墓方台部内に検出されたSK8からは弥生時代後期末の土器、SP245からも後期末の口縁部が欠損した小型の壺形土器が出土している。また同様に、3号墓の方台部内に位置する銅鐸の破片が上層から出土した小穴についても、時期が特定できない弥生土器片が数片出土したにすぎず、銅鐸の破片の確実な廃棄時期は分からないが、SK8やSP245の状況から勘案すると銅鐸の破片の廃棄時期も弥生時代後期末と考えることも可能となろう。もちろん、4・5号墓については従来通り弥生時代後期の遺構とは重複していないことから、古墳時代後期に掘られた柱穴に銅鐸の破片が混入した可能性も全く否定しえない。

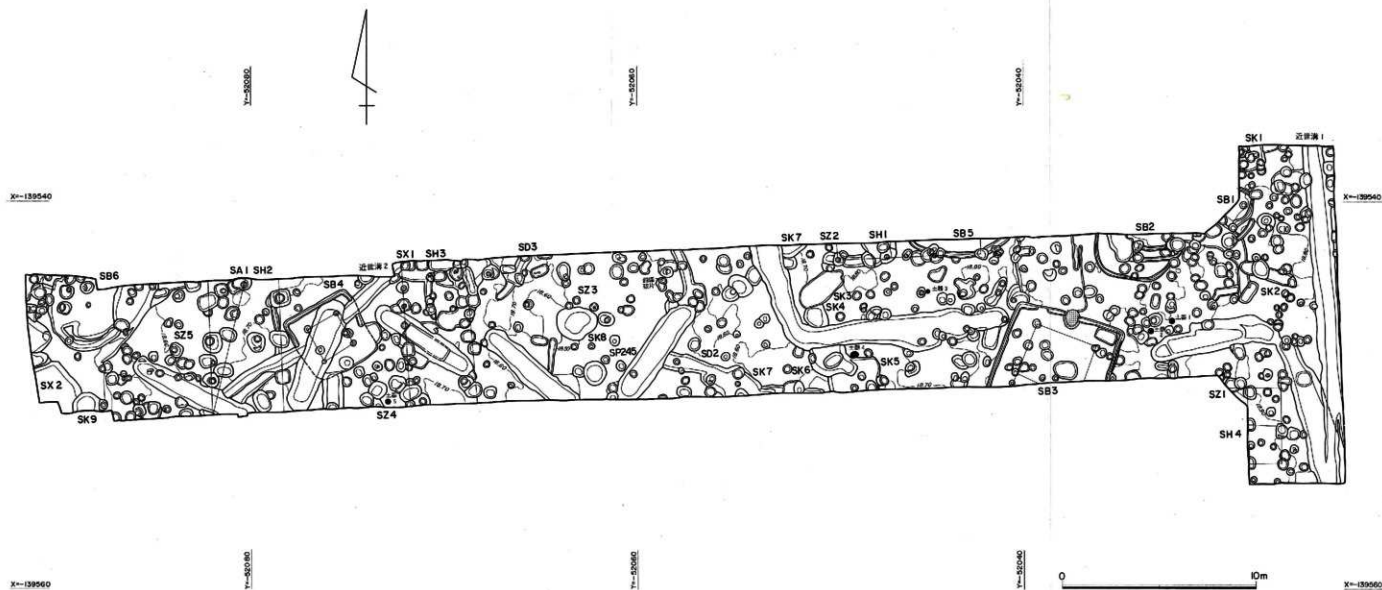
古墳時代後期を主体と考えられる土器や須恵器を出土するものは総数約80基となり、全体の数から見ると32%の比率となる。包含層出土の土器量から見ても妥当な数字であろう。古墳時代後期の柱穴は全体にまんべんなく検出されているが、古墳時代後期のSB3の北東の周辺、SH4の周辺で3号墓の方台部内でやや多く検出される傾向がつかめた。このあたりに古墳時代後期の掘立柱建物などの何らかの建物が存在していた可能も考えられる。その他調査区の東端大多數の柱穴は埋土の色調や出土土器から見ると、弥生時代後期に該当するものと考えられる。なお、古代～中世の遺物を出土する柱穴は確認できなかった。表土や近世溝からは中世～戦国期の遺物が出土しているので、何らかの中世遺構の存在が予想され、中世の遺構面が後世の擾乱で消滅している可能性も指摘しうる。

包含層中の土器集中地点は5箇所確認された。とくに土器集中1については古墳時代中期の見性寺Ⅱ-2式（松井一明 1995）に該当する土器が、径1m程度の範囲からまとまって出土し、器種も完形品は少ないものの高環中心であることから遺構として認識できない祭祀用土器がまとめて廃棄された土坑であったとも考えられる。土器集中3も土器集中1とほぼ同時期の土器からなる高環の数は少ない。土器集中4については坂尻Ⅰ-3式に該当し、付近に存在する堅穴住居とほぼ同時期であるため、遺構として認識できなかった土坑が堅穴住居が存在していた可能性がある。土器集中5については弥生時代後期・古墳時代前～中期の土器が混在しており、遺構にとまっていたものとは考えられない。

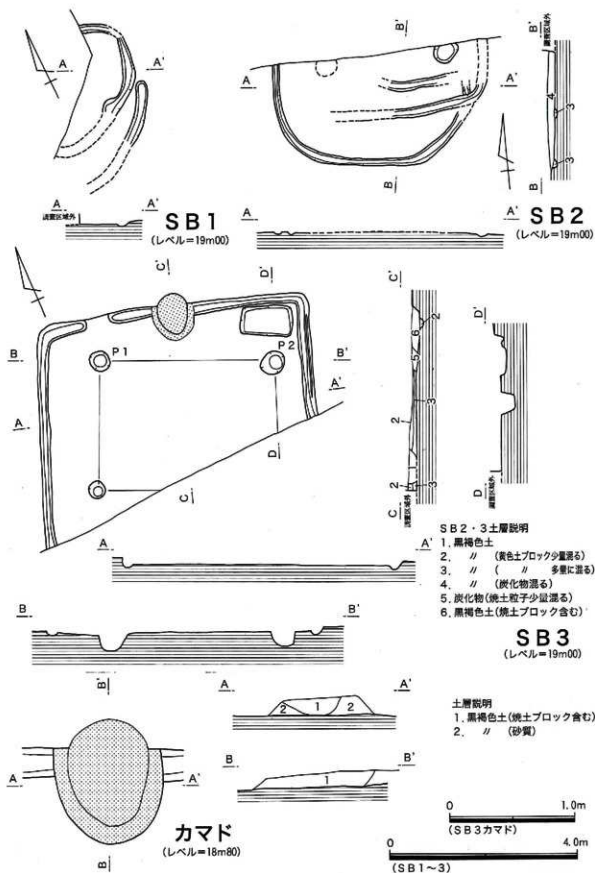
包含層中の遺物は、弥生時代中期以降居住域である東半分が多く、弥生時代の石器もほとんど東半分から出土している。古墳時代後期の土器については調査区全体でまんべんなく出土しており、柱穴の分布状況と合致した結果を示している。



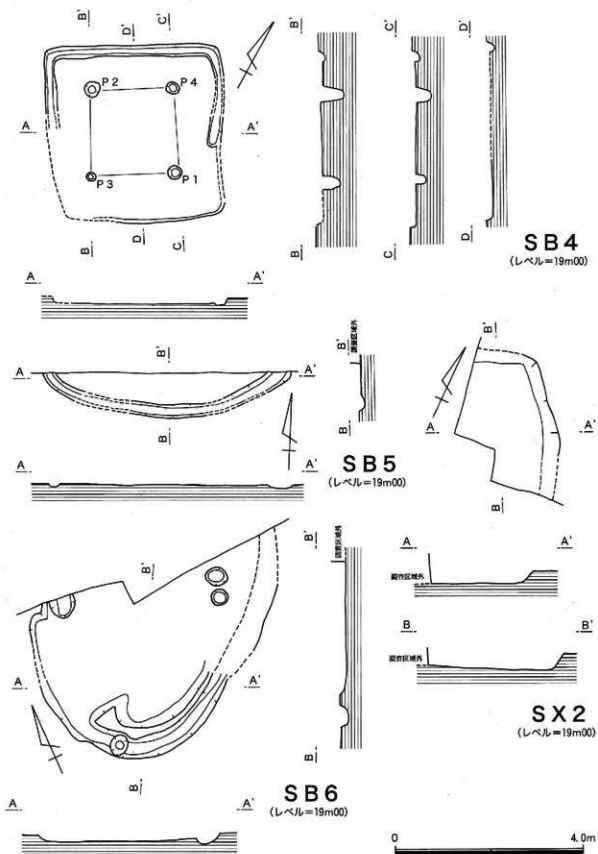
第2図 第9次発掘調査 土層図



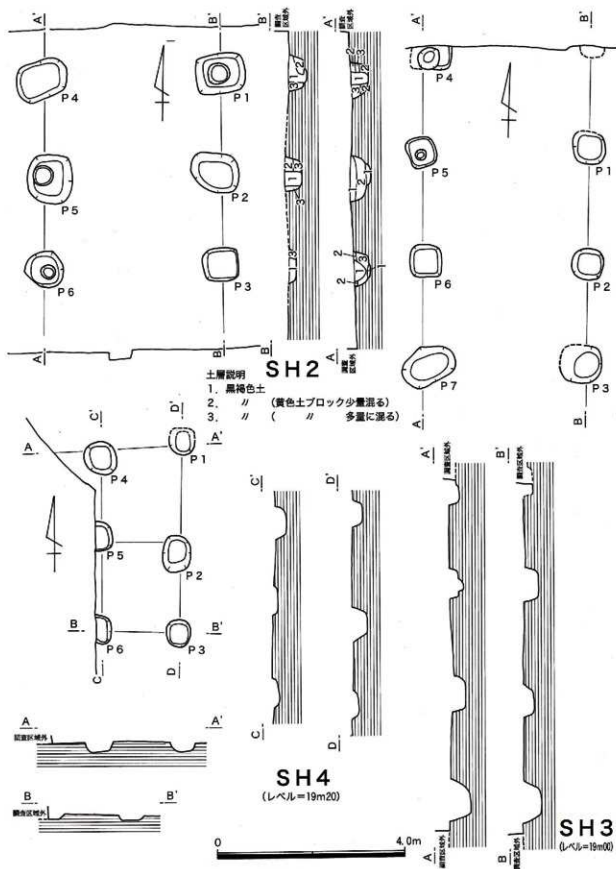
第3図 第9次発掘調査 全体図



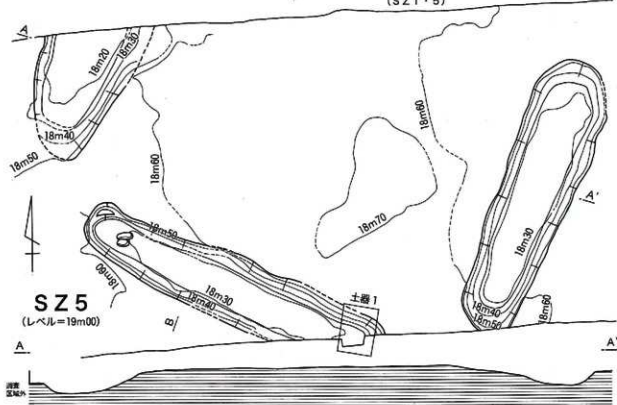
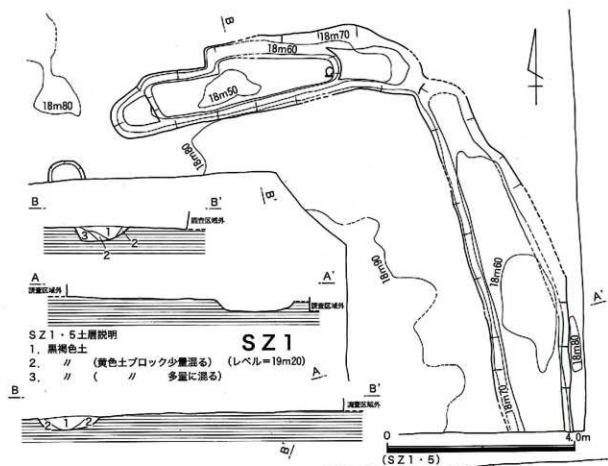
第4図 SB1~3 実測図



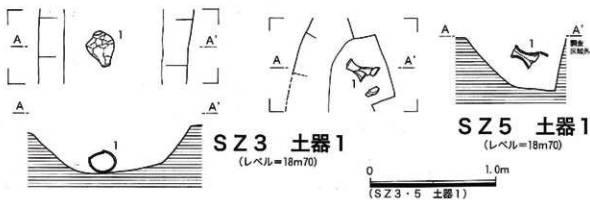
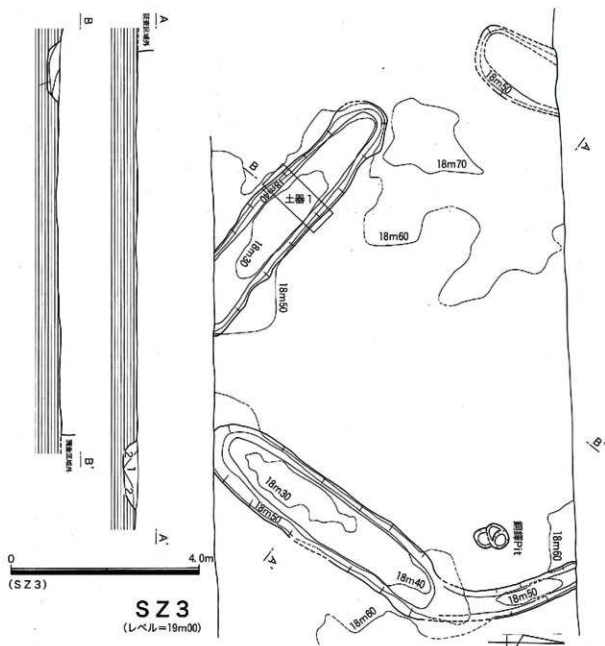
第5図 SB4~6 SX2 実測図



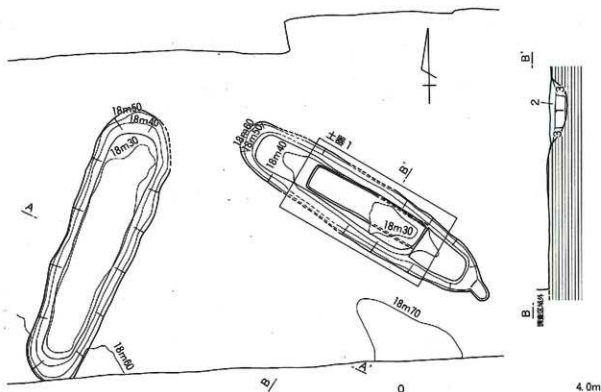
第7図 SH2~4 実測図



第8図 SZ1・5 実測図



第9図 SZ3・SZ5土器1 実測図



A.



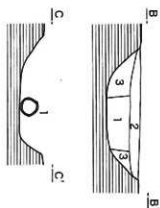
A' (SZ 4)

SZ 4

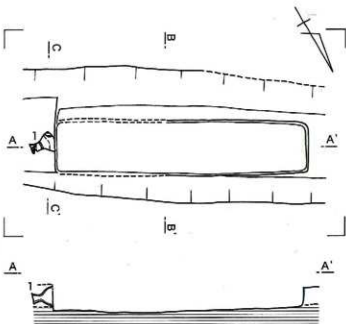
(レベル=19m00)

土層説明

1. 黒褐色土
2. // (黄色土ブロック少量混る)
3. // (// 多量に混る)



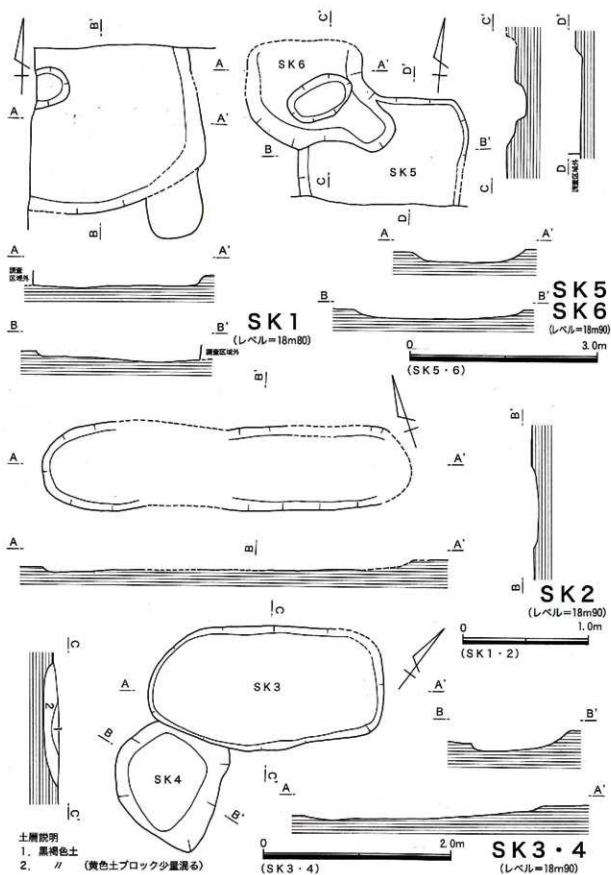
0 2.0m
(SZ 4 土器1)



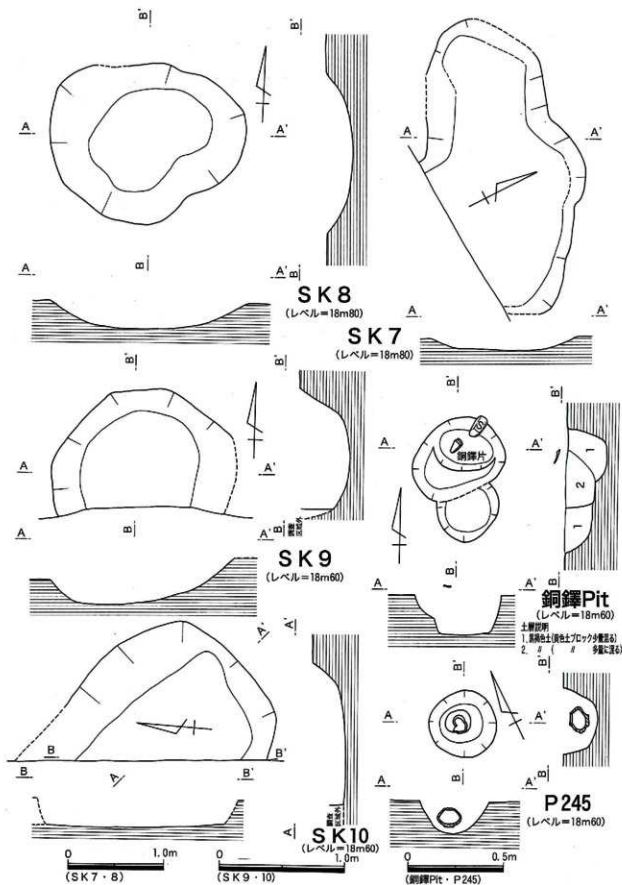
SZ 4 土器 1

(レベル=18m70)

第10図 SZ 4 実測図



第11図 SK 1～6 実測図



第12図 SK7～10・銅鐸Pit・P245 実測図

2. 遺物

縄文時代の遺物

土器・石器 縄文時代の土器は、包含層から出土した214は薄手の甕で、文様から見ると中期前葉の大畑C式段階（松井一明 1998）の土器と考えられる。8の黒曜石の剥片も縄文時代のものであろう。10の石匙、29の石鏃、32の礫素材の両面加工石器は、縄文時代中期に該当する可能性が高い。

弥生時代～古墳時代初頭の遺物

弥生時代については中期と後期の土器が出土している。包含層からは後期段階の土器が最も多く出土しているが、細片のものが多くで小破片資料については割愛した。また、個々の資料について説明する紙面もないので、一括性の高い土器についてのみ説明を加えていきたい。また、銅鐸の破片については、まとめの章で県内出土の銅鐸破片とともに紹介したい。

中期中葉の土器はSZ4北溝、土器集中5、包含層から破片で出土している。48・160は何れも横田式の壺で、160は赤彩されている。218については肩部に沈線紋、沈線間をミガキ調整を施す細頸壺で、西遠江～東三河の瓜瓢式の影響を受けたものと考えられる。

中期後葉の土器は方形周溝墓とSB2から出土している。SB2からは4の後期後葉の土器に混じって1と3の壺が出土している。壺の形態から、白岩式段階でもさほど古くならない段階と思われるものである。方形周溝墓のうちSZ3南・東溝から出土した38・39・46の壺と、SZ4北溝から出土している47・49の壺は、胴部が下膨れて胴部に段が形成される古い形態を残す。SZ5南溝から出土した55は受口の細頸壺で球形の胴部になる新しい要素をもつものである。よってSZ3・4出土の土器は白岩式の古段階、SZ5出土の土器は白岩式の新段階に属すると考えた。

後期の土器は前半を2時期（古＝鶴松9次004、新＝鶴松3次SD1）、後半を3時期（古＝堀越ジョウヤマSD1、中＝土橋SK77、新＝一色前田4号住）にわけて一括資料の検討をしてみたい。しかし、本調査地点では一括資料とはいえないまでも、ある程度指標となりそうなものは後半中～新段階の資料がほとんどである。該当資料としてはSZ2南溝、SK4・6・8・9・SP245が該当すると思われる。いずれも資料が断片的で、一括資料として説明できるものではないが、SZ2南溝出土の25の折返口縁壺については後期後半新段階、35もA類のS字甕に関連した薄手の台付壺で、後期でも後半新段階に該当すると考えられる。後期後半中段の資料としては75・79・88～94の壺、110・158の小壺、59の高坏、105の甕などがあげられるが、何れも破片資料である。

古墳時代前期の土器はSZ1と土器集中5から出土している。23の焼成後穿孔で下膨れ形態の小型壺、156の有稜の高坏、157の広口壺、159の小さな底部の壺が出土している。小型壺や広口壺の形態から見ると、古式土師器である小山角田I-2式（B類S字甕後半段階）に該当するものと考えたい。石器 大陸系磨製石器である12・14・15の扁平片刃石斧、17のたたき石に転用されていると思われる円柱状の形態である蛤刃石斧と考えられるものが出土している。いずれも、中期後葉段階と考えられるが、後期前半に下る可能性もある。11については加工斧の未製品の可能性があるものである。16・18の刃部に研磨痕のある硬砂岩の剥片石器や、全面研磨されている緑色片岩製の石包丁状石器とされた13も中期～後期前半に良く見られる石器であるが、顕微鏡では刃部に稲の収穫に関係した使用痕であるポリッシュは観察されなかった。19～22・24・26は叩石、23は凹みのある叩台、9・25・27・28・30・31は砥石で、30は金属の刻み痕のある砥石は古墳時代に該当するものであろうか。9については2次焼成を受けており砥石でない可能性もある。

古墳時代の遺物

須恵器・土師器 完形率の高い土器は遺構からよりも包含層からの出土が多かったので、包含層のも

のもできるだけ図示した。古墳時代中期のものは包含層中の土器集中Ⅰ・Ⅲから出土した125～152の資料が良好である。125～136と144～146の高坏は比較的低い脚部で中央が膨らむ形態、147の体部に沈線が施された壺、150～152の小型丸底埴、148の有稜口縁の壺、140・143の台付甕、141・142の球形甕が出土している。138と149が弥生時代後期の壺の可能性があり、何れも見性寺Ⅱ-2式（松井一明 1995）に該当するものである。167・168の小型丸底埴についても、同時期の可能性がある。

後期の土器はS B 3・4、S K 7、ビット、土器集中Ⅴ、包含層から出土している。Ⅴの坏、Ⅵの甕、109・153の長脚の高坏、111・154・155の直立口縁の長胴甕は坂尻Ⅰ-3式（松井一明 1995）、235・237の坏、236の模倣坏身、8・9の外反口縁、10のく字口縁の長胴甕は概ね坂尻Ⅰ-4式に該当するが、11の折返口縁の壺と86の短脚高坏、85の模倣坏は坂尻Ⅰ-1～2式に遡る可能性が高いと考えられる。

須恵器に関しては、5世紀代に遡るものとして楕円形の小透穴が穿たれている高坏の187と189の壺口縁はT K 208段階以前のごく古いもの、T K 208段階の坏蓋・身と思われる178・179、甕の113・188、T K 23～47段階の坏蓋・身の108・169・180・219・220がある。その他、外面格子目叩き、内面ナデ調整の壺や甕の破片である114・191～199・201～204・206・212・231～234を5世紀代に該当する須恵器と判断した。

6世紀代の須恵器としては、遠江Ⅱ期（MT 15）では短脚高坏の223、遠江Ⅲ-1期（T K 10）の坏蓋・身の171～174・181、長脚高坏の224、壺の190・228、遠江Ⅲ-2期（T K 43）の坏身の83・182・222、遠江Ⅲ-3期（T K 209）の坏蓋の175、埴の227が該当すると考えられる。T K 10段階に衛門坂窯の製品が一定量含まれていることが注目される。

遠江Ⅳ期（7世紀代）須恵器は、坏蓋・身である56・170・176・183～185、高坏の225・226、壺である12・229・230が該当する。この内、後半に該当するものは56・176・185である。

奈良時代以降及びその他の遺物

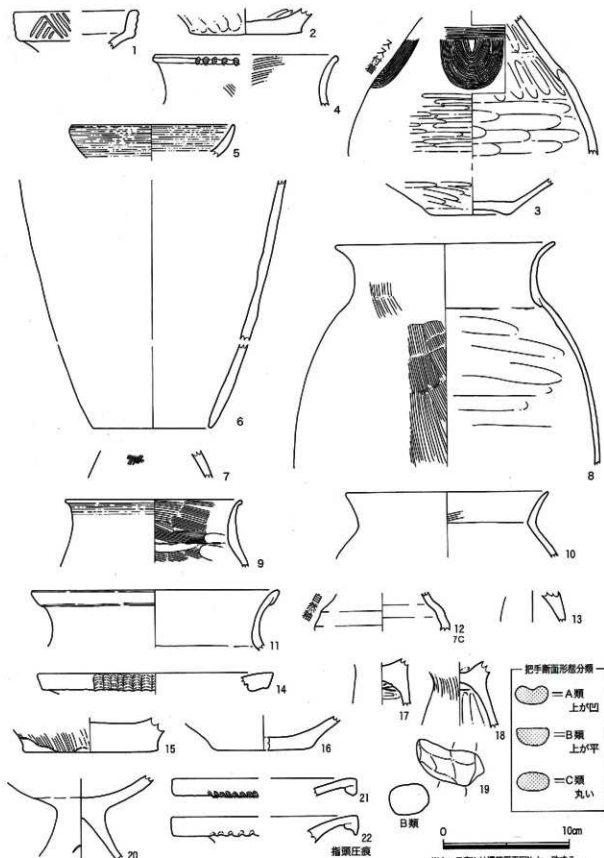
奈良時代の遺物として177・186の坏蓋・身、長頸瓶の215・216・242が包含層から出土した。8世紀前半のものと考えられる。土師器については確実なものは出土していない。238の祭祀用のミニチュア土器は古墳時代後期～奈良時代のものと考えられる。

中世の土器については、116・217の13世紀中葉（Ⅲ-2期、松井一明 1993）になる渥美・湖西産の山茶碗がS D 1、包含層から出土している。

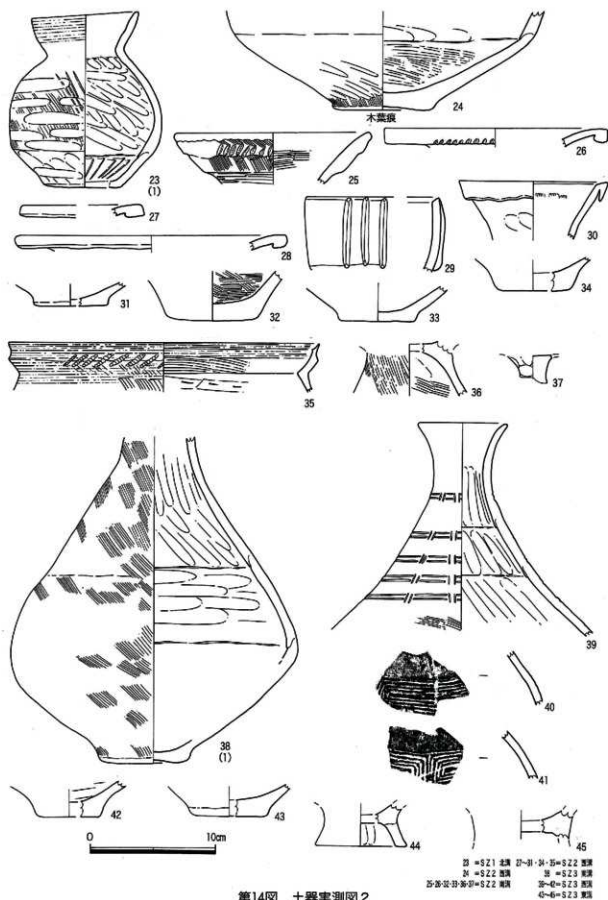
戦国期から江戸初期の土器については、瀬戸・美濃の登窯製品の天目茶碗の121、大窯4期併行の志戸呂産の天目茶碗の122、瀬戸大窯4期新段階の志野丸皿の241、同時期の天目茶碗の240（藤沢良祐 1986）のほか、17世紀代に該当すると思われる緑釉皿の124、土師質土器としては17世紀前半に該当するかわらけの239、同時期の内湾口縁の内耳鍋の244も江戸時代末の溝や表土から出土している。

江戸時代後期の遺物はS D 1から瀬戸産の灰釉丸碗である117～119、肥前産の染付筒茶碗の123と大皿の243は18世紀後～19世紀前半の製品、120の瀬戸産染付丸碗については19世紀後半の明治時代に降る製品と考えられる。

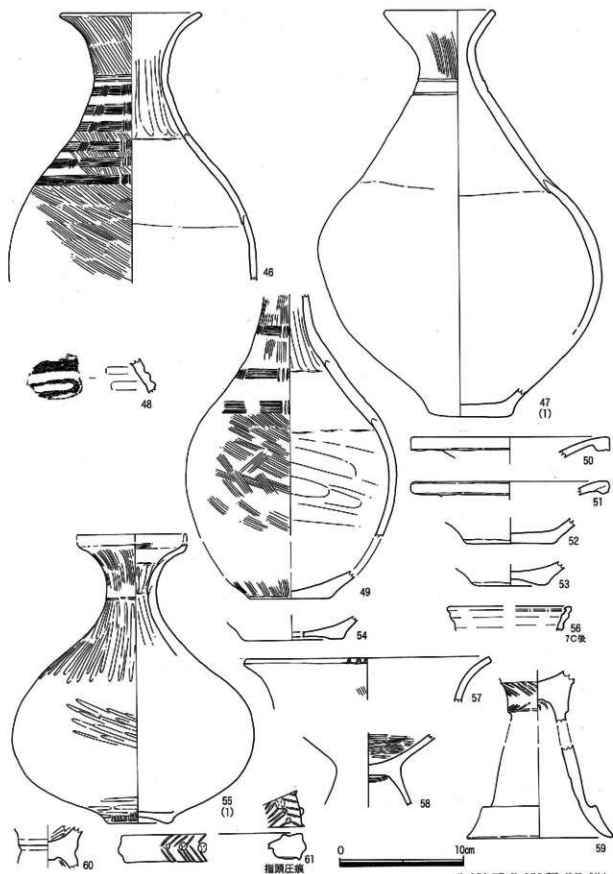
その他包含層出土の、3・4の土製紡錘車、5の滑石製の紡錘車、2の土製支脚は古墳時代後期、鉄製品の6の鉄剣と思われるものは古墳時代前～中期、1の土錘は硬質の焼成で中世以降に該当すると考えられる。7の銅製円環は一見6世紀代前半の耳環に似るが、成分分析の結果（第6章参照）鉛が一定量含まれていること、銀装でないことから、中世以降の製品であると考えた。



第13図 土器実測図1

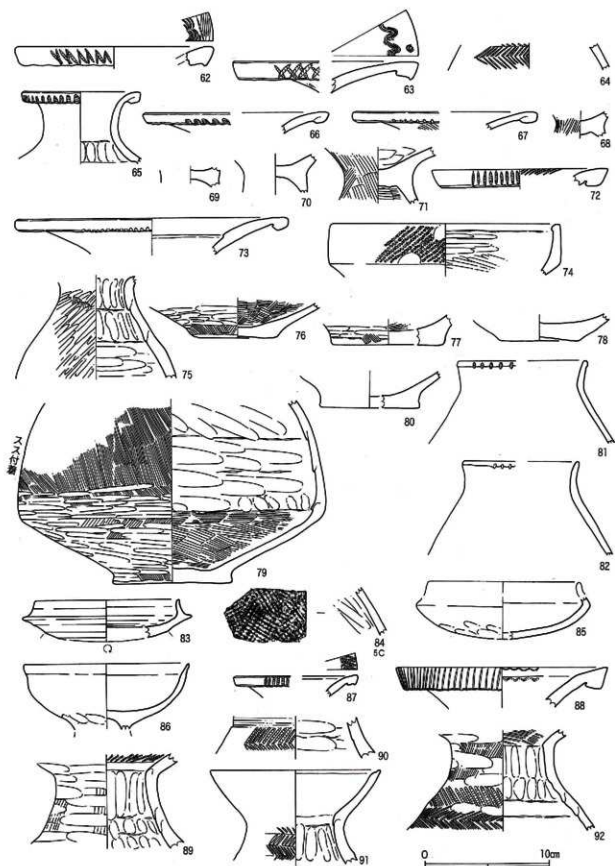


第14図 土器実測図2



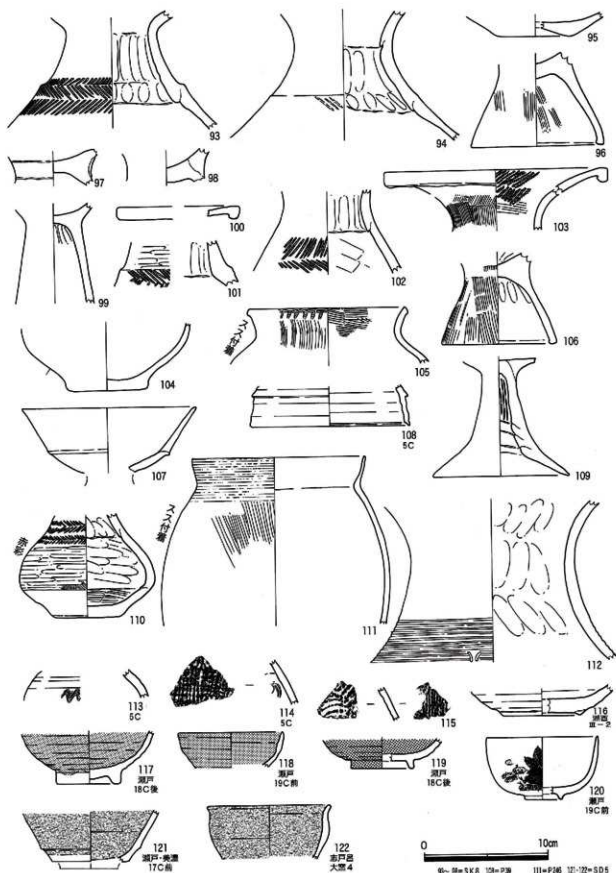
第15図 土器実測図 3

46=SZ3 京濃 55=SZ5 南濃 58-59=SK4
 47-49-52-54=SZ4 北濃 56=SK2 60-61=SK6
 50-51=SZ4 西濃 57=SK3

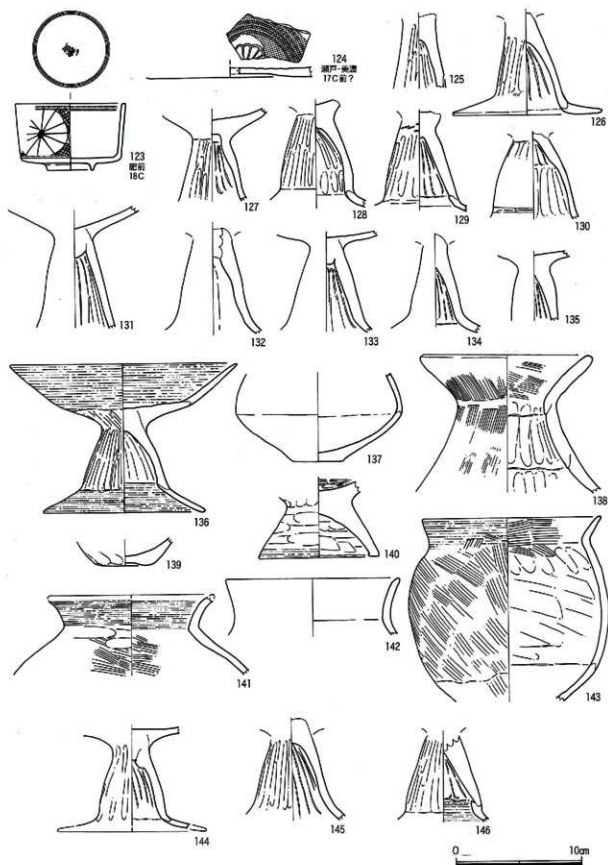


第16図 土器実測図 4

62~62 = SK 6
 83~86 = SK 7
 87~92 = SK 8

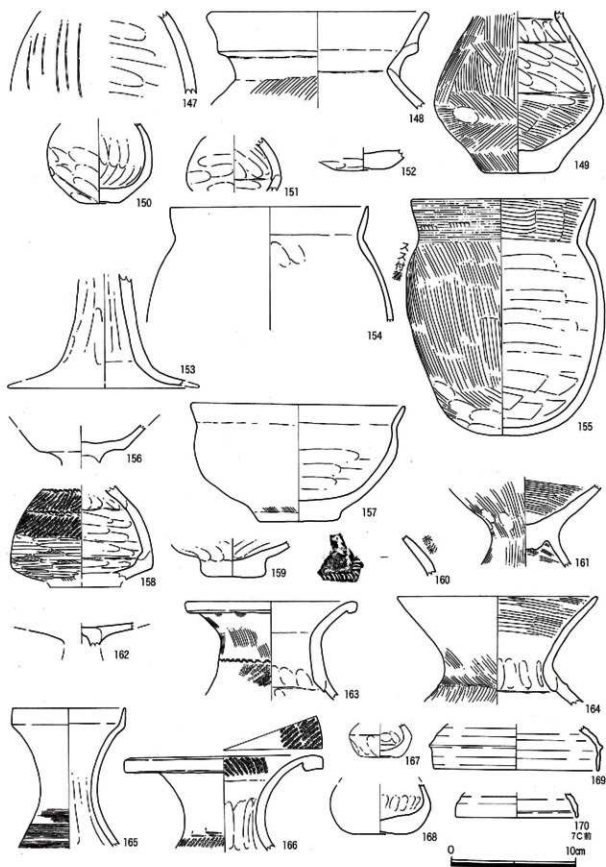


第17図 土器実測図5



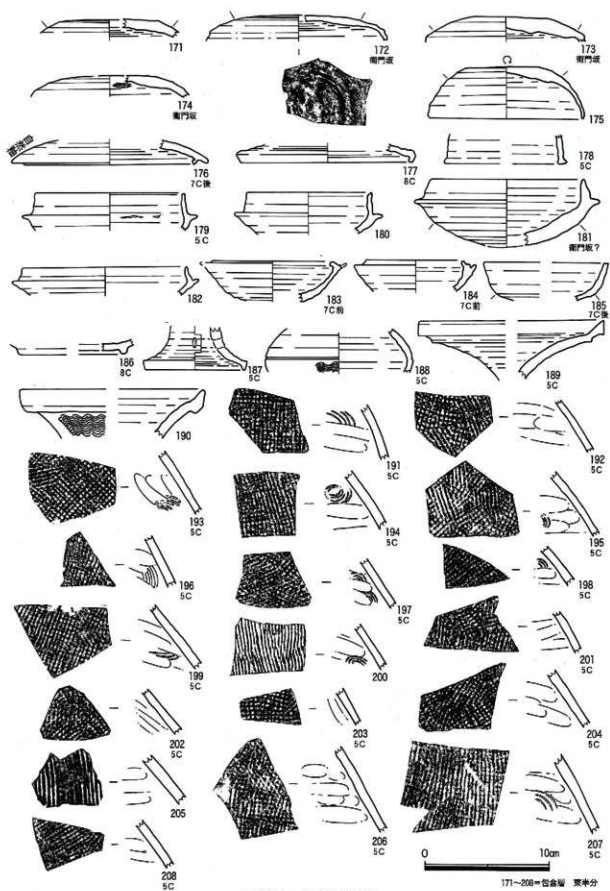
第18図 土器実測図6

123・124=SD5
125~143=包倉層(土器集中1)
144~146=包倉層(土器集中3)

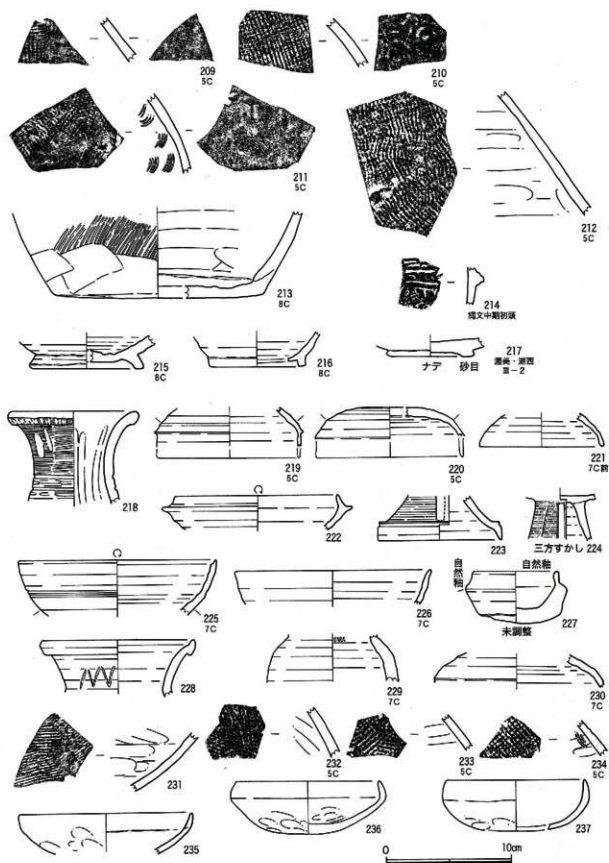


147~152=包谷潭(土器編中3)
 153~155=包谷潭(土器編中4) 153~170=包谷潭 蘇平分
 156~162=包谷潭(土器編中5)

第19図 土器実測図7



第20圖 土器実測図8

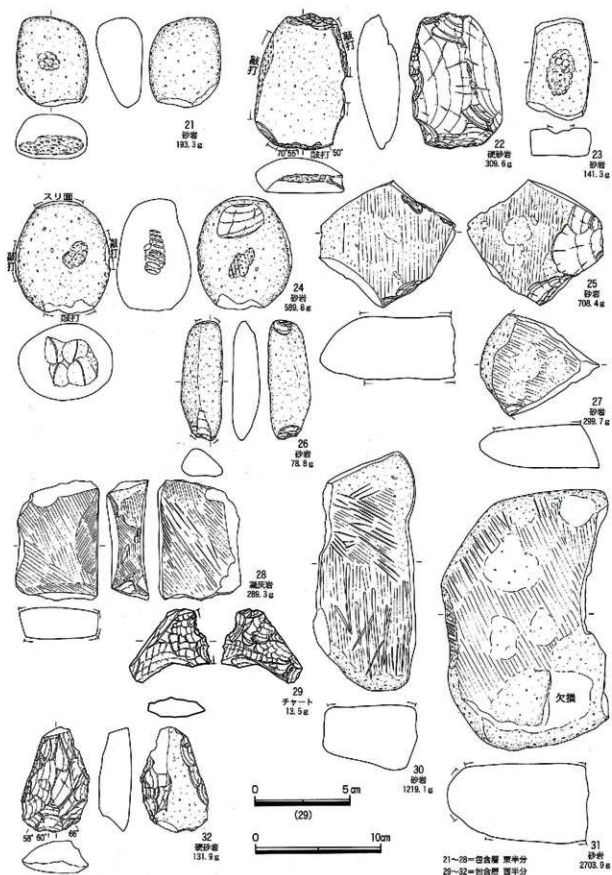


第21図 土器実測図9

209～217＝弥古層 東半分
218～237＝弥古層 西半分



第22図 土器実測図10・金属製品・石製品実測図1



第23図 金属製品・石製品実測図2

第5章 第10次発掘調査の遺構と遺物

1. 遺 構

第10次発掘調査でも検出された遺構は、隣接の調査区である第7次発掘調査と同様に弥生時代後期、古墳時代後期の遺構が中心となった。弥生時代～古墳時代後期の包含層は、畑地となっていた調査区南半分で厚さ20cmの表土の下に20～30cmの厚さで確認されたが、北半分では茶園になっていたせいかな改植を受けており攪乱され失われていた。

竪穴住居（SB）

竪穴住居は弥生時代後期のもの1棟、古墳時代後期のもの1棟が検出された。

弥生時代のSB11は全体の4分の1程度しか検出されていないが、おそらく隅丸方形で壁際に狭い壁溝を巡らしている。一般的な位置に柱穴は見られないが、深さから見て壁際にそれらしい小穴が1基確認された。炉跡と思われる良く焼けた焼土面も検出されており、北寄りに位置することから、この住居の出入口は南にあると考えられる。時期については出土土器が細片のため明確ではないが、後期後半中～新段階の土器片が埋土から出土している。

古墳時代後期のSB12は、部分的な検出に留まったが、幅の狭い壁溝をもち、平面形態が方形で、規模は4m程度になると推定され、当地域ではごく一般的な竪穴住居である。支柱は2基しか確認されていないがこれも一般的な4本柱になると推定される。通常北壁に付設されていると考えられるかまどについては、調査区外に存在すると思われる。時期のわかる遺物はほとんど出土していないが、SB5の埋土から出土した須恵器細片から見ると、遠江Ⅲ-2段階（坂尻Ⅰ-3式）になる。

掘立柱建物（SH）

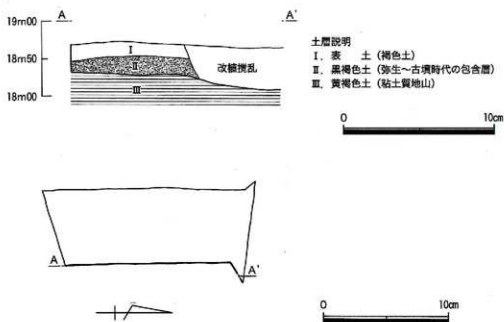
SH8の1棟しか抽出できなかった。梁間1間の建物と考えたが、柱ならびの非常に悪い建物で、桁行き3間以上の長2m以上、梁行きは1間2mになる小型の土間造式の建物である。主軸方向から時期を検討すると、SB12や第7次発掘調査地区で検出された古墳時代後期の竪穴住居とほぼ方向は合う。また、柱穴からも詳細な時期は分らないが古墳時代後期に該当すると思われる土師器の小破片が出土するため、SB12と組み合わせになる掘立柱建物と考えると、SB12と同時期の建物と想定される。

土坑（SK）

土坑は狭い調査区内で6基も検出され、第7次発掘調査区の様相と一致する内容となった。SK38～41についてはほとんどが弥生時代後期の土器を出土したが、SK42・46からは8世紀代の須恵器や土師器が出土している。

弥生時代後期の土器を出土する土坑のなかで比較的多く出土したのはSK38・40である。出土状況からは復元できたものは多いがかなり破損している状態で出土したこと、甕と高環が主体を占め壺がほとんど出土しなかったこと、小型土器が出土したことなどから見ると、単なる土器等の廃棄土坑ではなくて、祭祀等に係わる土器を廃棄した可能性も指摘できようか。時期は出土土器からどちらも後期後半中段階と考えられる。SK39は小型の土坑で土器の出土量も少ないことから、土器以外の単なる廃棄土坑と考えたい。時期は確実ではないが、出土土器片から見ると後期後半中段階に属すると考えられる。SK41は溝状を呈する大型土坑で、土器の出土量は少ないことから、土器以外の単なる廃棄土坑と考えたい。時期は後期後半中段階に属すると考えられる。

SK42についてはSB11と重複しているが奈良時代初頭に属するもの、SK46は奈良時代以降に該



第24図 第10次発掘調査 土層図

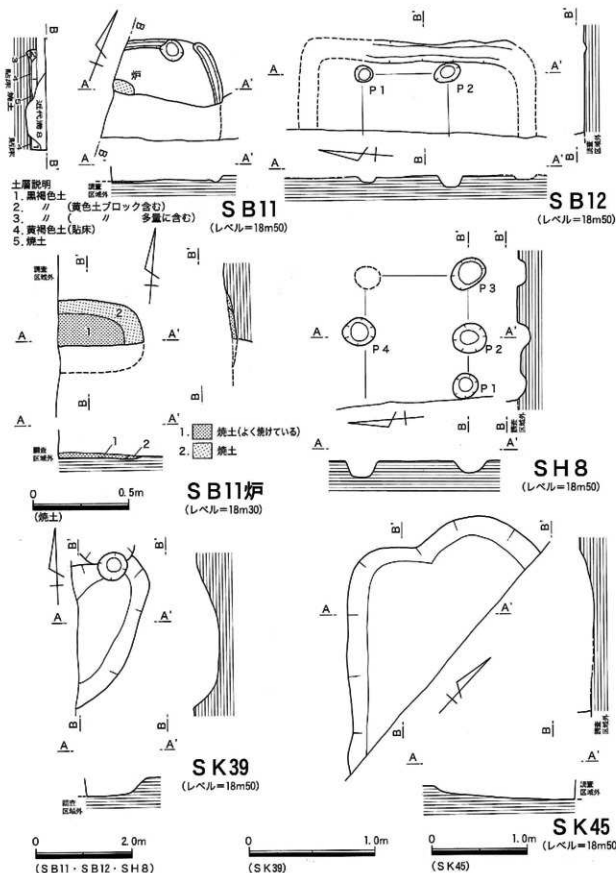
当する風倒木跡の上坑である。

溝 (SD)

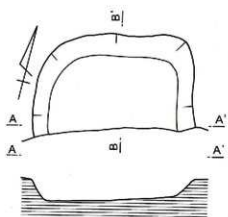
今回の調査区で認められた溝は、主軸が北で南北方向に走る近世溝5、東西方向にのびる近世溝9の2本の溝が検出された。何れも表土から掘り込まれていることから、江戸～明治時代の地割溝と考えられるものである。出土遺物は中世の山茶碗が出土したにすぎず、時期の特定できる遺物は出土していない。おそらく遺物量が少ないことから見て江戸末～明治にかけて機能していた畑地の地割溝の可能性が高いと考えられる。特に溝9については現在の地割と合うことから、ごく最近まで機能していたものと考えられる。

柱穴 (SP)

掘立柱建物の柱穴も含めて総数約70基の柱穴が検出できた。分布はまんべんなく検出されているが調査区中央で多い傾向が認められる。この内古墳時代後期の土師器や須恵器の小破片を出土した小穴は、総数25基を数えるため、古墳時代後期の時期の占める柱穴の比率は35%を測る。周辺部の弥生～古墳時代の集落域になるの調査地点の状況が、20～30%となるため、本調査地点での比率を考えるとやや高い傾向が認められるが、調査区が狭いため誤差の範囲内に収まる結果であろう。おそらく、遺構の密度から考えても第7次発掘調査地点の状況とほぼ同じように集落域を形成していたと考えられる。



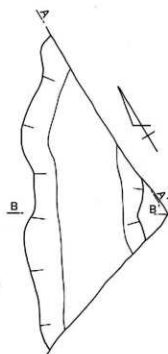
第26図 SB11・12・SH8・SK39・45 実測図



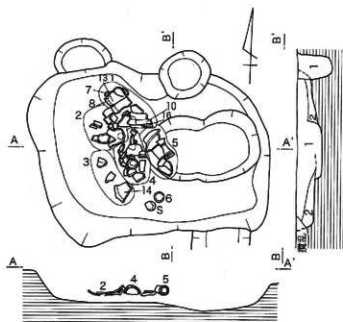
SK42
(レベル=18m50)

土層説明

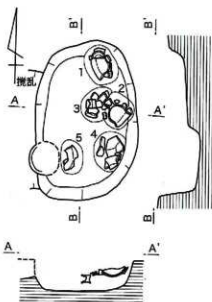
1. 黒色土
2. // (黄色土ブロック含む)



SK41
(レベル=18m50)



SK38
(レベル=18m30)



SK40
(レベル=18m30)

0 1.0cm

(SK42・SK38・SK40)

0 2.0cm

(SK41)

第27図 SK38・40～42 実測図

2. 遺物

遺物については縄紋時代の土器片や石器・剥片、弥生時代中期～後期、古墳時代前期～後期、古代、中世の土器等多岐に渡るものが出土している。ただし、包含層出土の土器については小破片が多く、図化しうる最低限のものを掲載した。

縄紋時代の遺物

土器・石器 縄紋時代の遺物は46の竹管による横沈線紋と刺突紋の施された中期後葉の里木Ⅱ式と思われる土器片、1の礫素材の硬砂岩製のスクレイパー、2の短冊型になるとと思われる薄手の緑色片岩製土器具（打製石斧）が出土している。

弥生時代の遺物

土器 弥生時代の遺物は中期と後期の土器が出土している。中期の土器は少なく53の細頸の中期後葉の白岩式でも新しい段階になりそうな壺が出土しているが、これ意外には目立った土器は小破片を含めても確認できなかった。

後期の土器は前半を2時期（古＝鶴松9次004、新＝鶴松3次SD1）、後半を3時期（古＝堀越ジョウヤマSD1、中＝土橋SK77、新＝一色前田4号住）にわけて一括資料の検討をしてみたい。一括資料となるものは、SK38・40の資料、ある程度指標となりそうなものはSK41の資料、その他の資料は参考程度のものである。SK38・40については壺はよく分からないが、8・25のように折返口縁部下端に指頭圧痕が顕著に見られるものが、後期後半中段階以降の特徴である。高環は口縁部を肥厚させる単純口縁の6・14以外は、折返口縁で口縁端部紋様は10のように刷毛目を残す無紋か、11・21・22の折返部下端に刺突紋、ないし5・9・23・24のように棒状浮紋が施され、脚部との接合部文様は有段で2～3単位の横羽状刺突紋、脚部下端は外に開く形態となっていることから、後期後半中段階の典型的な形態と文様をなしている。台付壺は13・17・18・26・27のようにくの字状口縁でやや長胴気味の形態を成しており、これも後期後半中段階の典型的な形態を示している。ただし28のように長胴化しておらず胴部下半が萎む形態や、29のような球形の胴部をもつ折返口縁の台付壺のように後期後半古段階の古い形態を残すものもある。

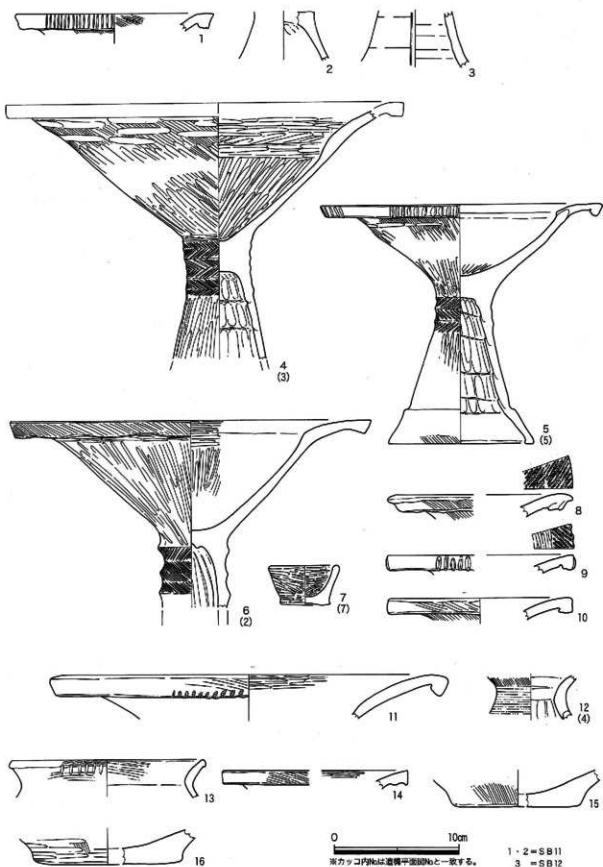
断片的な資料であるが、SK39出土の19の壺はやや長胴気味の体部を成しており後期後半古段階の様相を示している。SK41出土の30はほぼ水平に開く鐮状単純口縁の高環は後期前半古段階、31の脚接合部の4条の横刺突紋の高環、38・39の外反口縁の台付壺は後期前半新段階の様相を示すものである。40の内彎気味の単純口縁の壺は、後期後半中段階の特徴を示している。

古墳時代とその他の遺物

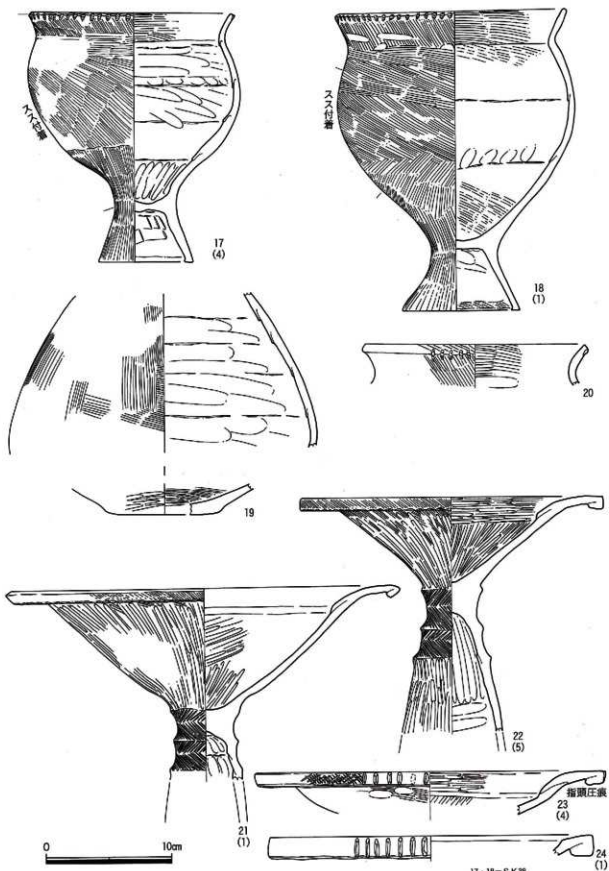
古墳時代の遺物はほとんど包含層や柱穴からの出土である。須恵器は、3の2段透の高環と55の坏身は遠江編年Ⅲ-2期（TK43）、47の甕は遠江Ⅳ期（7世紀代）、TK23～47段階（5世紀後半代）になるとと思われる56の壺、内面ナデ調整の61～63の甕が出土している。41は高台が底部外縁に取付く特徴から奈良時代初頭の高台坏身であろう。

土師器は古墳時代前期のものとしては45の折返口縁が崩れたものは小山角田Ⅰ-1期の古式土師器でもごく古い時期のもの（松井一明 1995）と考えられる。後期の資料としては、57の模倣坏蓋は坂尻Ⅰ-2期、52の模倣坏身は坂尻Ⅰ-3期、44・49の模倣坏身・蓋は坂尻Ⅰ-4期に該当するものである。50・51の坏、58の短脚高環は坂尻Ⅰ-3～4期に該当するものであろう。42は奈良時代の台付皿の皿部と考えられる。

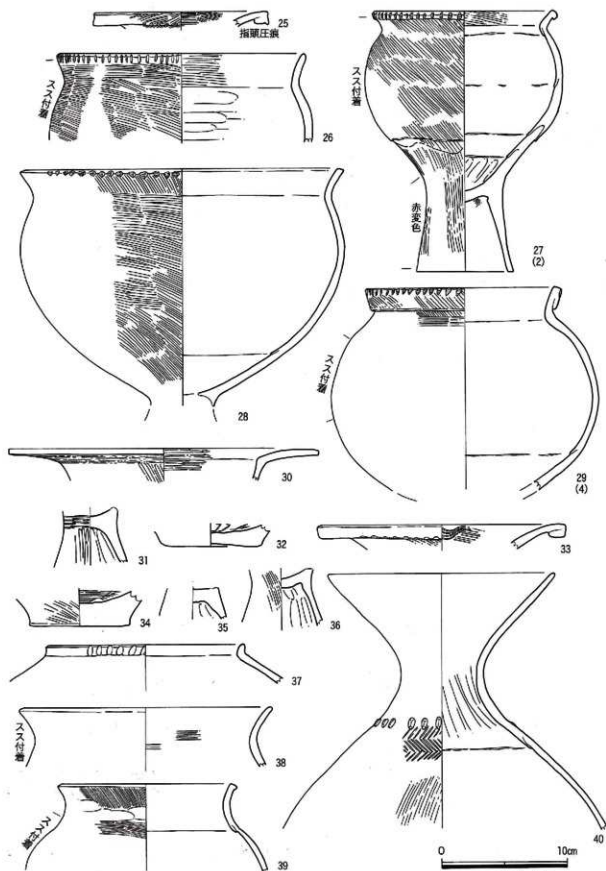
中世の土器としては、43の12世紀前葉（Ⅰ-1期、松井一明 1993）になる瀬美・湖西産の山茶碗が近世溝より出土している。



第28図 土器実測図 1

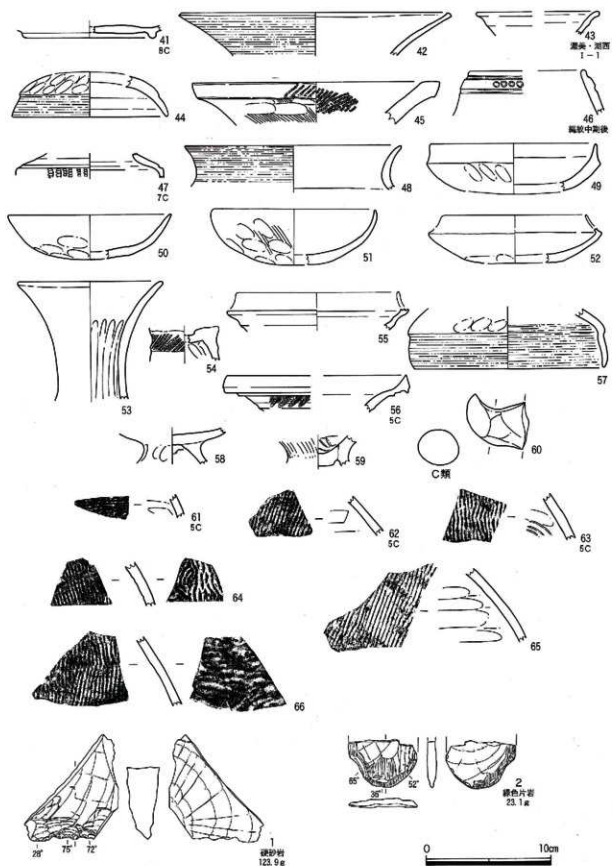


第29図 土器実測図 2



第30図 土器実測図 3

25~29 = S K 40
30~40 = S K 41



第31図 土器実測図4・石製品実測図1

第6章 掛之上遺跡出土の銅鐸破片・耳環の科学的分析

財団法人 元興寺文化財研究所

菅井 裕子 井上美知子 渡辺智恵美

独立行政法人 東京文化財研究所

平尾 良光 鈴木 浩子

掛之上遺跡から出土した銅鐸片と耳環について、保存処理の事前調査として自然科学的分析を行う機会を得たので報告する。各遺物のケイ光X線分析は井上美知子と菅井裕子が、耳環の構造調査は渡辺智恵美が行った。銅鐸片の鉛同位体比測定による産地推定は平尾良光と鈴木浩子が行った。

1. 耳環の分析

1) 分析内容

耳環について、ケイ光X線分析（以下XRF）による表面からの非破壊分析、およびマイクロスコープによる微視的観察を行った。

2) 使用機器及び測定条件

- ・エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ製 SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ0.1mm、管電圧50kV

- ・マイクロスコープ（勝キーエンス VH7000S）

3) 分析結果および考察

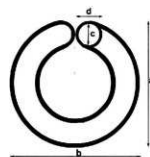
耳環の法量は第1表のとおりである。

第1表 耳環の法量

重量(g)	a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)
1.2	21.0	21.4	2.1	2.1

XRFによる分析箇所を写真1に、スペクトルを第32図1、2に示す。耳環表面の緑灰色部分から検出したのは、主に銅（Cu）、亜鉛（Zn）、鉄（Fe）、鉛（Pb）、スズ（Sn）であった。また淡褐色部分からは、主に銅、亜鉛、鉄、鉛、スズであった。その他チタン（Ti）、マンガン（Mn）等も検出した。淡緑色部分と淡褐色部分で検出した元素の相違点は、淡褐色部分に土壌成分が多い点であった。

以上より青銅製であることが判明した。青銅製耳環は他の遺跡でも出土しているが、出土量は非常に少ない。今回の分析で検出された元素のうち、特筆すべきものとして亜鉛が上げられる。亜鉛は全体的に分布しており原料中に含まれていた可能性も考えられるが、周辺土壌からの汚染も考慮しなければならない。今回は土壌の分析を行っていないので、



法量測定箇所



写真1 耳環の分析箇所

どちらに起因するかは不明である。

次にマイクロスコープによる細部の観察結果について述べる。耳環は全体的に土で覆われていたが、部分的に暗緑色を呈する。比較的なめらかな面と緑灰色を呈する面（粉状にきびいている）が散見された（写真2）。分析結果より緑灰色を呈する面は表面が剥離して内部が露呈している状態であると推定される。

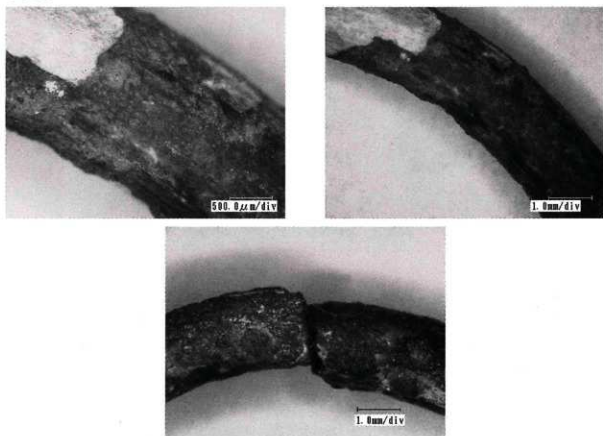


写真2 耳環のマイクロスコープ像

2. 銅鐸破片の分析

2-1 XRF分析

1) 分析内容

銅鐸片について、XRFによる表面からの非破壊分析を行い、含有元素を確認した。

2) 使用機器及び測定条件

- ・エネルギー分散型X線分析装置（セイコーインスツルメンツ（株）製 SEA5230）
モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8mm、管電圧45kV

3) 分析結果

XRFスペクトルを図3に示した。主に銅（Cu）、スズ（Sn）、及び鉛（Pb）を検出しており、青銅製の銅鐸片である。他に鉄（Fe）、銀（Ag）、ヒ素（As）、及びアンチモン（Sb）を含んでいた。銀、ヒ素、アンチモンは青銅の中に当初から含まれているものとする。

2-2 鉛同位体比測定

1) 資料

資料は静岡県袋井市掛之上遺跡から出土した銅鐔片である。銅鐔片は第9次調査地点の3号方形周溝墓方台部内の小穴上層から出土した。型式には突線鈕2式または3式の範疇に収まるとのことである。資料の写真を写真3に示した。なお試料の採取は元興寺文化財研究所が行った。

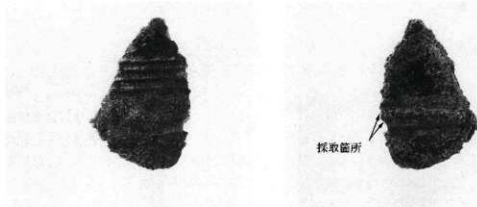


写真3 資料写真および試料採取箇所

2) 分析法

① 鉛同位体比法による青銅材料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した¹¹⁾。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地の違いを示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錆を微量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用した。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した¹²⁾。

② 鉛同位体比の測定

資料から微量(1mg以下)の錆を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。試料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2マイクログラムの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製の全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

3) 鉛同位体比の測定結果と考察

① 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を第2表で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために

鉛同位体比の図で示した（第32図4）。

第2表 静岡県掛之上遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比

資料名	出土地	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
銅鐸片	掛之上遺跡	17.744	15.547	38.414	0.8762	2.1649	HS1136
	誤差範囲	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした(3~7)。日本の弥生時代に相当する時期の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛と推定される。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鐸が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が集中する領域で、日本産鉛の範囲とした。Dは朝鮮半島産とされる多鈕細文鏡が分布する領域の中央線として示される。またaは弥生時代後期の銅鐸が集中した領域である。

横軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中でA'、B'、C'、D'はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わしている。

これらの図の中に測定値を「●」で示した。

② 結果と考察

掛之上遺跡から出土した銅鐸片は、第32図4のA式図においてA領域の中でも画一的な鉛を示すa領域に位置した。B式図においても同様である。

これまでの研究で、突線鈕2~5式銅鐸や広形銅矛など弥生時代後期青銅器の鉛同位体比はa領域に位置することがわかっている(7)。本資料である銅鐸片と突線鈕2~5式銅鐸の鉛同位体比を第32図5に示した。掛之上遺跡から出土した銅鐸片がa領域に位置したことから、弥生時代後期に作られた青銅器と同じ材料を使用していると考えて良いだろう。

4) 引用文献

- (1) 平尾良光 1999 「鉛同位体比を用いた産地同定」『考古学と自然科学4 考古学と年代測定学・地球科学』松浦秀治・上杉陽・薬科哲男編 314-349 同成社
- (2) 平尾良光・馬淵久夫 1989 「表面電離型同位体質量分析計VG-Sectorの規格化について」『保存科学 28』17-24
- (3) 馬淵久夫・平尾良光 1982 「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM No.370』4-10
- (4) 馬淵久夫・平尾良光 1982 「鉛同位体比法による銅鐸の原料」『考古学雑誌68』42-62
- (5) 馬淵久夫・平尾良光 1983 「鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)」『MUSEUM No.382』16-26
- (6) 馬淵久夫・平尾良光 1987 「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—」『考古学雑誌73-2』71-82
- (7) 平尾良光編 1999 『古代青銅の流通と鑄造』鶴山堂

【測定条件】

測定装置	SRAS230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	291
試料室雰囲気	大気
コリメータ	$\phi 0.1\text{mm}$
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
コメント	2001-1520 鹿井市 No.2 耳環 緑灰色

【試料像】



視野:[XY]6.25 4.67 (mm)

【測定条件】

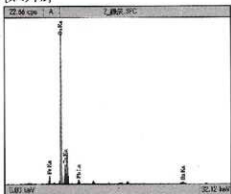
測定装置	SRAS230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	291
試料室雰囲気	大気
コリメータ	$\phi 0.1\text{mm}$
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
コメント	2001-1520 鹿井市 No.2 耳環 灰褐色

【試料像】



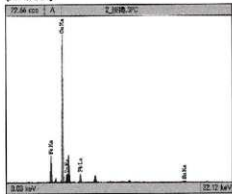
視野:[XY]6.25 4.67 (mm)

【スペクトル】



1 耳環A部分のXRFスペクトル

【スペクトル】



2 耳環B部分のXRFスペクトル

【測定条件】

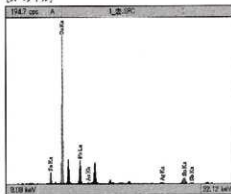
測定装置	SRAS230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	216
試料室雰囲気	大気
コリメータ	$\phi 1.8\text{mm}$
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	20
コメント	2001-1520 鹿井市 No.1 銅鐸残片 表面

【試料像】

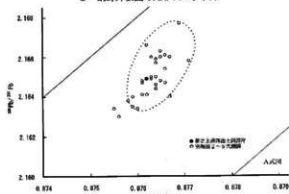
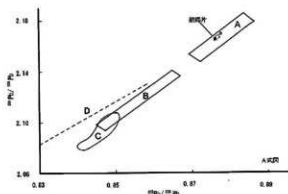


視野:[XY]5.25 4.67 (mm)

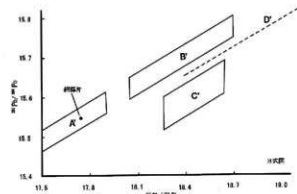
【スペクトル】



3 銅鐸片表面のXRFスペクトル



5 掛之上遺跡出土銅鐸片と矢野2-5式銅鐸の鉛同位体比



4 掛之上遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比

第32図 掛之上遺跡出土の耳環・銅鐸片のスペクトル・鉛同位体比分析図

第7章 ま と め

今回調査した第9次発掘調査地区及び第10次発掘調査地区では、弥生時代中～後期、古墳時代後期の良好な遺構、遺物を確認することができた。本章では報告書作成のための時間制約もあるので、主に3時期の遺構と銅鐸の破片についての評価を記述するに留め、まとめに替えた。

1. 弥生時代中期集落の様相

第10次発掘調査地区では中期の遺構は発見されなかった。第9次発掘調査区では方形周溝墓3基、竪穴住居3棟が検出された(第33図参照)。竪穴住居は出土した土器の数が少ないため時期は定かではないが、白岩式新段階に該当しそうである。周溝墓については土器から見ると、5号周溝墓南溝出土の土器が白岩式新段階となる以外、3号墓と4号墓から出土している土器は白岩式古段階のものである。混入品であると思われるが4号周溝墓北溝から嶺田式壺の破片も出土しているため、周溝墓群の築造時期幅については従来通り中期中葉～後葉が想定される。

中期の方形周溝墓の平面形態は東海地域に特徴的な、四隅に陸橋をもつ形態である。第35図に示した第1次発掘調査地区を参考にすると、掛之上遺跡の方形周溝墓の群構成は随時墓道に添って重列状態で造墓を行ったと想定され、溝は前段階のものをあまり再掘削しないでそのまま利用した結合式で行うことが特徴的である。このように墓道を意識した重列状態で造墓を繰り返す方法は、東海地域のなかでも特に遠江で特徴的な群構成の在り方である。ただし、隣接する方形周溝墓が溝を再利用し合う結合式が掛之上遺跡での特徴的な造墓方法と見られたが、第5・6次発掘調査地区の方形周溝墓では全く溝を再利用しない造墓方法も見られるので、掛之上遺跡の中でも均一的な群構成の在り方を示していない。この違いは、第5・6次発掘調査地区の方形周溝墓での大きさが一様でないことと関係しそうである。均質的な大きさの方形周溝墓からなる群構成は、第1次発掘調査地区の重列配置の方法(山下・掛之上遺跡型群構成)、駿河地域で見られたやや突出する大きさをもつ方形周溝墓を中心として団子状にまとまる方法(瀬名遺跡型群構成)に分けて考えたことがある(松井一明 1992)。後者の群構成が第5・6次発掘調査地区の方形周溝墓群になれば、遠江で最初に確認できる瀬名遺跡型群構成の方形周溝墓群となるが、この点については別の報告書で検討する。第6次発掘調査地区の群構成を検討すると、調査区が狭いため確定的なことは言えないが4号と5号墓は少なくとも溝の一辺を共有するため、結合式の可能性が高い。3号と4号墓については溝は共有、切り合いどちらもないため、別の単位群を構成するものと考えられる。おそらく3号と4号墓の間には墓道の存在が想定され、3号と4・5号墓の2単位群が認定される。4・5号墓の接合した溝の上層からは新旧関係はないが、土器から見ると4号墓が古く、4号から5号墓への造墓の順番が考えられる。

3号墓東溝と4号墓北溝で確認された連結溝については、遠江では広野遺跡6号墓で確認されており、時期は中期末に該当する。今回の事例からは白岩式古段階まで遡る資料であるため、遠江での連結溝の出現は方形周溝墓伝播の初現から存在する可能性が高まった。

中期段階における確実な周溝内埋葬の事例を提供できた。遠江における周溝内埋葬らしい土坑が検出された事例をあげると、中期段階では袋井市団子塚遺跡で3例、袋井・掛川市山下遺跡で4例、下滝遺跡で1例、後期段階では袋井市高尾向山遺跡で5例、袋井市愛野向山遺跡で1例、下滝遺跡で3例の合計17例が候補となった(松井一明 1998)。ただし、ここで取り上げた事例のすべてが周溝内埋葬と報告されていないため、はたしてどの程度周溝内埋葬として認定しても良いか問題が多い。すなわち、周溝内埋葬については発掘調査の過程でかなり注意して調査を進めないと見つからない性格の

遺構であるため、その検出には調査精度が求められ、実態としてはもう少し増加する傾向はあると思う。しかし、少なくとも全ての方形周溝墓に見られるものではない。すでに指摘した通り（松井一明 1998）、周溝内埋葬は関東～東海東部地域にすべての方形周溝墓に普遍的に存在するものではないため、都出比呂志氏が指摘した東海東部以東の方形周溝墓の主体部が方台部内1基、周溝内埋葬数基で東国の家族墓という図式（都出比呂志 1984）は成り立ちそうもないことを指摘しておきたい。

さて、集落の周りに居住域と墓域を区画するであろう環濠については、今のところ中期の遺構が発見された今回の第9次発掘調査地区のほか第1・2・6・7次調査地区の何れからも発見されていない（袋井市教育委員会 2001）。さらに、隣接する大門遺跡でも第2・5次発掘調査地区にて中期集落の端と思われる場所を発掘調査しているが、環濠の発見はなかった（袋井市教育委員会 1983・1990）。現状では掛之上遺跡、大門遺跡ともに環濠集落になるとはいえないが、何れの調査面積もきほど広いものではないため、確実に非環濠集落だとも断定できない。

以上、第9次発掘調査地区での中期集落の様相は墓域と居住域が確認され、その境の状況について狭い面積ではあるが明らかにすることができた。また、掛之上遺跡と大門遺跡が環濠集落になるかなんかの問題については、今回の調査ではならない可能性が高まったが、静岡県下全体の環濠集落の問題と係わるため、その要因については今後の検討課題としておきたい。

2. 弥生時代後期集落の様相

今回の第9と第10次発掘調査地区では、後期の遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが発見されたことから、後期段階では居住域であることが判明した。第9次発掘調査地区では後期の墓は発見されず、中期の方形周溝墓は3号墓を除いて基本的には後期段階でも破壊されずそのまま存続していたものと考えられる（第33図参照）。

3号墓の墳丘内からは銅鐸破片出土の小穴や、弥生後期後半中段階の小型土器を出土したSP245、同時期のSK8が存在し、後期後半中～未段階で3号墓は一部破壊されていた可能性が高い。現在のところ第5・6・8次や第1・7・10・11次発掘調査地区（第35図参照）では弥生中期の方形周溝墓と後期の遺構が重複することはないため、掛之上遺跡の場合基本的には中期の方形周溝墓が破壊される時期は、古墳時代後期になってからと考えられる。ではなぜ3号墓が弥生時代後期後半に破壊されたのか、その理由を考えるとおそらく弥生後期末に該当する溝に囲まれた掘立柱建物SH1の存在が目される。SH1は全体の建物型式や規模は分からないものの、この掘立柱建物は現在まで確認されている弥生時代後期の掘立柱建物とは異なり、溝で囲まれていること、同じ位置で何回かの立て替えがあること、溝内から希少品であるA類S字壺や手づくね土器等が出土していることから考えると、一般のレベルの建物とは考え難いものである。おそらく、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての時代の大きな変化に係わり出現した、首長あるいは祭祀用とも考えられる何らかの特殊な用途の建物と考えられるため、この建物付近の弥生時代中期の墓を削平したと考えられる。付近から出土した銅鐸の破片もこの時期のものと考えることが可能ならば示唆的である。何れの用途とするのかを断定するには、もう少し周辺部の調査の状況が明確になってから結論づけられるべきだろう。

第10次発掘調査地区では第7次発掘調査地区と同様に、竪穴住居や土坑が確認され居住域であることが判明した（第35図参照）。とくに土坑については、甕も存在するが壺はほとんど無く高坏が主体となりしかも破片化していることから見ると、祭祀目的の土器を廃棄した可能性が指摘できようか。本調査区についても集落を区画する溝は確認できず、後期段階でも環濠集落とはならないようである。

3. 古墳時代集落の様相

第9次発掘調査区では前期では方形周溝墓、中期では土器集中、後期では竪穴住居と掘立柱建物が

検出されている(第34図参照)。古墳時代前期の方形周溝墓については、掛之上遺跡では初めての検出例となり、弥生時代後期同様に中期の方形周溝墓とは重複しないことが判明した。しかし、後期の墓域が中期の墓域の空地に設けられるのに対して、今回の古墳時代前期の墓域は集落内に入ってきていることが注目される。すなわち、弥生時代後期段階から古墳時代前期段階に大きな墓域のさなる変更と、墓の数のいっそうの減少があった可能性が指摘されるのである。

古墳時代中期の土師器や初期須恵器は今までの調査区からも古墳時代後期の遺構や包含層から少しずつ確認されてきている。今回の5世紀前葉の土師器を中心とする土器集中は包含層中の出土ではあったが、器種として高坏に主体があること、土器の破片が折り重なるように出土していることから見ると、おそらく祭祀に使用したものを土坑に廃棄したものと考えられる。しかも2基発見されたことからこの付近に古墳時代中期前葉の祭祀の場所が存在していたと推測させる。前回の報告書では5世紀代の須恵器の出土傾向は、遺跡の北部地区に多いと考えたが(袋井市教育委員会 2001)、第9次発掘調査地区でも一定量の初期須恵器が出土したことから、遺跡の中央地区にも古墳時代中期の遺構の存在が予想されるようになってきた。

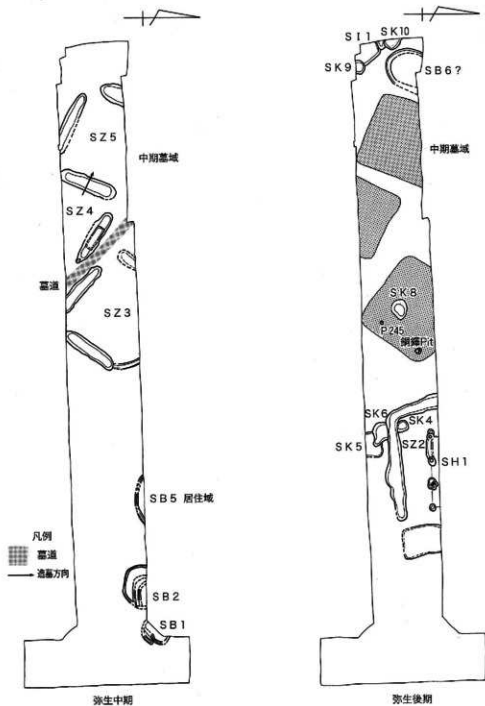
古墳時代後期の遺構としては竪穴住居、掘立柱建物、土坑が確認された。竪穴住居S B 3は北側にかまどとその脇に貯蔵穴をもち、大きさも一辺6mを測る当地域ではごく一般的な竪穴住居である。S B 4についてはかまどはなく、大きさも一辺4mを切る特殊な小型竪穴住居である。他の調査地区では炉をもつものもあるため、倉庫のような用途のものとも思えないが、小型であることから何らかの作業場的な用途をもつものとも思われる。掘立柱建物のS H 4については、ほとんど調査区外に存在するため建物型式は良く分からないが、おそらく2間×2間の総柱の高床倉庫になると思われる。S B 3と組み合わせにより一単位の建物群を形成すると思われる。

第10次発掘調査地区では、竪穴住居と掘立柱建物が各1棟確認された(第36図参照)。いずれも遺構の大半が調査区外になるため詳細な内容は分からないが、一般的な竪穴住居と土間造りの建物の組み合わせになるものと考えられる。時期としては竪穴住居S B 12は6世紀後半と考えられることから、6世紀中葉まで存続した居館の廃絶後の建物群の一つと考えられる。

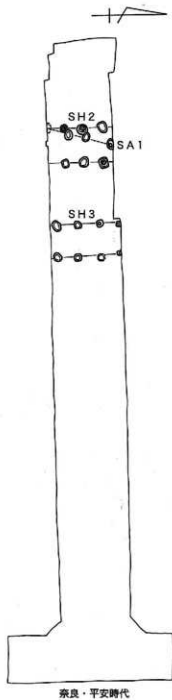
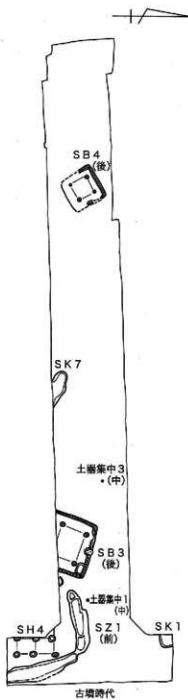
4. 奈良時代集落の様相

奈良時代の建物としては掘立柱建物と櫓列らしいものが発見された。何れも狭い範囲での検出でありほとんどが調査区域外となるため全体規模や建物型式は不明である。しかし、判明している範囲で推測すると桁行3間以上、梁行1～2間程度の土間式の長屋風建物になると思われる。先に述べた通り第5・6・8次発掘調査地区の郡衙関連遺構の主軸方向とは異なること、建物規模が小さいことから見ると郡衙中枢域に直接係わる建物群とは考えられない。佐野郡衙である袋井市坂尻遺跡では郡衙中枢部の周辺にやや規模が小さく、建物の主軸が不揃いな関連建物群が存在することが明らかとなっている(袋井市教育委員会 1995)。今回検出された建物群も、郡衙中枢部周辺に存在する建物群の一つになると思われるが、性格を特定する遺物や文字資料が出土していないため、その性格は不明といわざるを得ない。

櫓列としたS A 1については郡衙関連遺構の主軸方向と概ね合致すること、柱穴の堀方が古墳時代の櫓と比べると大きいことなどから、郡衙関連の何らかの区画施設の存在が推測されるが、郡衙中枢遺構を区画するものかどうか分からない。今後の周辺部の調査結果をまちたい。

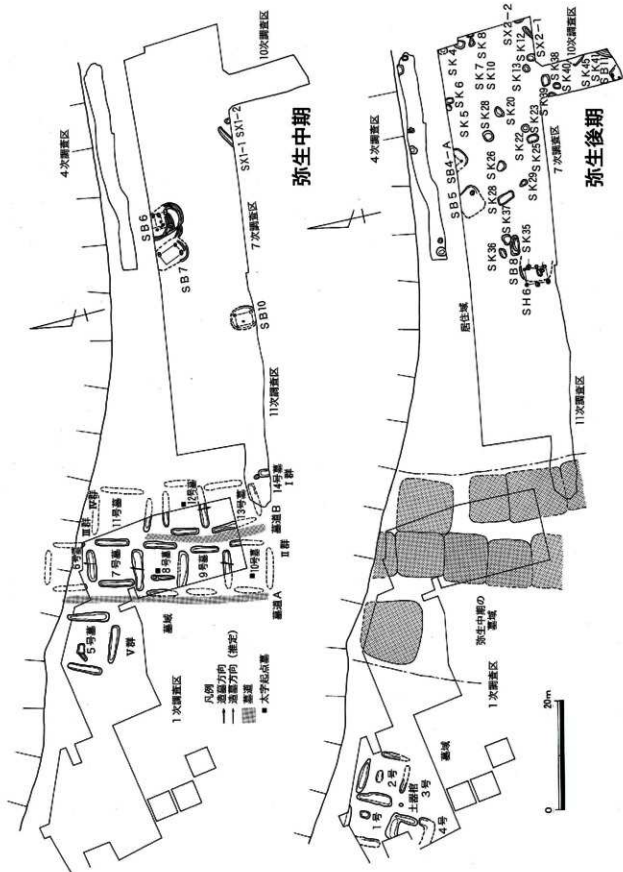


第33図 第9次発掘調査遺構変遷図1

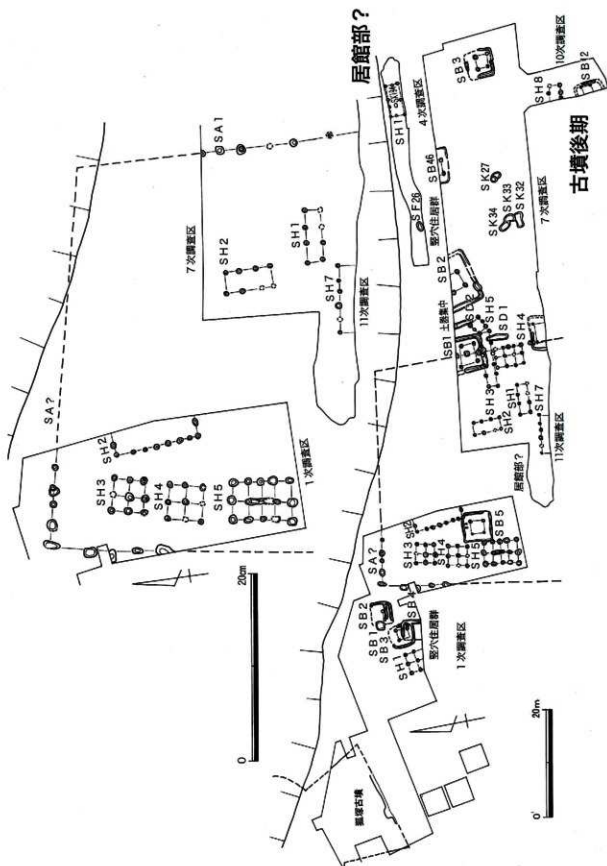


0 10m

第34図 第9次発掘調査遺構変遷図2



第35図 第1・4・7・10・11次発掘調査遺構変遷図1



第36図 第1・4・7・10・11次発掘調査遺構変遷図2

4. 第9次発掘調査出土の銅鐸の破片について

今回出土した銅鐸の破片は、3号墓墳丘内の小穴上層から出土しているが、埋納というより混入と考えたほうがよい出土状況である。伴出遺物は弥生後期と思われる土器の小破片しかないため明確な廃棄時期は分からないが、先に述べたように3号墓内のSP245やSK8、SH1との関連、小穴から古墳時代後期の土器は出土していないことから、廃棄時期は弥生時代後期末と考えた。

まず、銅鐸の時期について検討してみたい。掛之上遺跡出土の銅鐸の破片は、第37図1に示した通り、表面に4条の突線からなる下辺横帯下の界線、内面には突帯が観察されることから銅鐸身下部の下辺横帯部分であることが分かる。下辺横帯に通常見られる鋸歯文については、錆あがりが悪いせいかよく観察できなかった。また表面には細かな凹凸があるため磨いてはいないことが分かる。突線も繊細であり、内面突帯も断面蒲鉾形を呈するが比較的幅狭く高さも低いものであることから、近畿式銅鐸の特徴を示すものと考えられる。難波洋三氏に実見してもらったところ、下辺横帯下界線と内面突帯の位置関係が比較的近い特徴から、概ね突線鈕2～3式の幅の中でも突線鈕3式の古相を示すものかとのご教示を受けた。

つぎに素材の科学分析、鉛の同位体比の結果(第6章参照)から見ると、中国華北産領域のなか、とくに弥生時代後期の青銅製品の集中域に入ることが分かった。すなわち、素材の面からも突線鈕2～5式銅鐸の典型的な領域に入っていることが判明した。

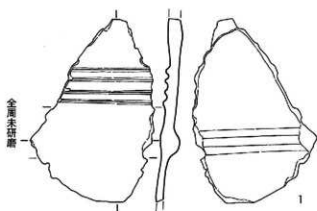
静岡県内では銅鐸の出土例が銅鐸破片を含めて26遺跡33例あり、今回の例を含めると27遺跡34例となる。このうち銅鐸破片の出土例は、浜松市縄子遺跡(浜松市教育委員会 1983)で飾耳1点、同松東遺跡(浜松市文化協会 1990)で双頭渦紋飾耳1点、同(伝)浜松南海岸(向坂鋼二 2000)で双頭渦紋飾耳と鏃の2点、沼津市藤井原遺跡(沼津市教育委員会 1976)で双頭渦紋飾耳1点、大仁町段遺跡(大仁町教育委員会 1994)で飾耳1点の5遺跡6点である。このうち発掘調査で出土した4遺跡4点の資料が実見できたので、再実測したものを第37図に示した。

2の飾耳は縄子遺跡第7次調査のA4区土坑2から後期前～中葉の伊場式段階の土器と共に出土している。表・裏面ともに5本の突線が見られほぼ同じ描方をしている。折面を観察すると凸凹がなく摩耗したかのようにになっているため、2次加工がなされていたと判断した。飾耳の形状と大きさから見て、近畿式で突線鈕2～3式の特徴を示すものと考えられる。

3の双頭渦紋飾耳は松東遺跡2次調査の土坑SX08から中世の土器と共に出土している。表・裏面の渦の形状やそれを繋ぐ弓状の突線はそれぞれ異なる描方をしている。裏面の錆あがりはよくないせいか突線の一部が確認できない。折面を観察すると凸凹が顕著に認められるので、2次加工はないと判断した。飾耳の形状と大きさと形状から、近畿式で突線鈕2～3式の特徴を示すものと考えられる。

4の飾耳は段遺跡中央C-10グリッドVII層の古墳時代前期の土器と共に出土している。表・裏面とも6本の弧状の突線が見られほぼ同じ描方をしている。突線の彎曲具合から見ると双頭渦紋飾耳ではないと思われる。中央やや下に穴が1ヶ所穿たれている。折面を観察するとほとんど縁辺部が破損しているため詳細は分からないが、わずかに残った折面らしい場所を観察すると摩耗したような面が見えるため、2次加工があった可能性を指摘したい。飾耳の大きさはかなり大きいものであることから、近畿式でも突線鈕4～5式の特徴を示すものと考えられる。

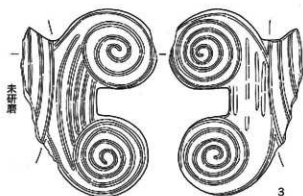
4の双頭渦紋飾耳は藤井原遺跡第3次調査の古墳時代前期の堅穴住居から出土している。表・裏面ともそれぞれ異なる描方をしている渦紋が見られる。中央上端に穴が1ヶ所穿たれており2次加工がなされていることは明白である。折面を観察するとほとんど縁辺部が破損しているため詳細は分からないが、わずかに残った折面らしい場所を観察すると凹凸のある場所もあるが摩耗したような面も見



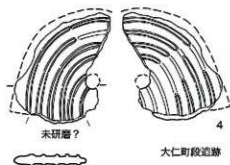
袋井市掛之上遺跡 9次調査



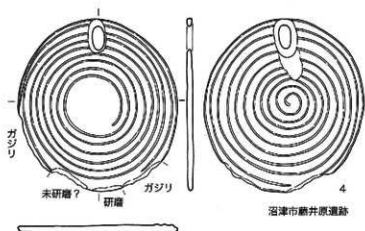
浜松市幌子遺跡
7次調査



浜松市松東遺跡



大仁町段道跡



沼津市藤井原遺跡



第37図 掛之上遺跡及び県内銅鐸破片集成図

えることから、2次加工があった可能性が指摘できる。なお、表・裏面ともに手擦のような摩耗が全体的に見られ、かなり使い込んでいたことが分かる。飾耳の大きさはかなり大きいものであることから、近畿式でも突線鈕4～5式の特徴を示すものと考えられる。

以上の静岡県出土の銅鐸破片から見ると、いくつかの傾向を読み取ることができる。①銅鐸破片はすべて近畿式である。②飾耳が主体ではあるが、掛之上遺跡のように胴部の破片も存在する。③県東部の藤井原遺跡・段遺跡のように突線鈕4～5式の新しい銅鐸を利用したものは、垂飾品として再利用されており銅鐸本来の機能から逸脱しているのに対して、掛之上遺跡・松東遺跡のように2次加工がなく再利用していたかどうか分からないものもある。梶子遺跡については、2次加工は認められるが穿孔はなく垂飾品としては利用されていない。④県西部のものについては突線鈕2～3式の比較的古い型式のものが主体となる。といった傾向が認められた。

②の点から見ると飾耳については垂飾品などの再利用製品の素材とも考えられるが、松東遺跡のように未加工のものがあつたり、掛之上遺跡のように胴部の破片も存在することから、必ずしもすべての銅鐸の破片が垂飾品としての再利用製品の素材となるものかどうか疑問である。また、静岡県下の銅鐸の分布圏の東限は、実物が確認できるものとして天竜川以東では豊岡村敷地西の谷遺跡の三連式の突線鈕3式銅鐸3点（内2点は敷地銅鐸）、記録上では掛川市長谷出土の三連式の突線鈕3式銅鐸1点についてはほぼ確実なものだが、辰馬考古資料館所蔵の伝修善寺町堀切・益山寺出土の近畿式の突線鈕5式銅鐸1点については伝承の確認がとれていない（梅原未治 1927）ので、現状では掛川市域までということになる。よって垂飾品が認められる地域は、銅鐸分布圏外であることが分かる。

③の点から見ると、銅鐸破片の使用目的と時期が県西部と東部では異なると考えられる。県西部では弥生時代後期末までには廃棄が完了し垂飾品などの再利用はなされず、県東部では垂飾品の再利用品のみが古墳時代前期まで認められるということである。県東部の状況については銅鐸分布圏外であるため、銅鐸本来のもつ意味は失われていたことによるものと考えられる。県西部の銅鐸破片については廃棄時期が弥生時代後期で取まることから、銅鐸本来の機能と係わり合っていたものと考えられる。その用途については集落内からの土坑や小穴から廃棄された状態で出土しているため、銅鐸本来の使われ方とは異なる要素も見られる。銅製品を造るための素材であるという考え方もあるが、今のところ県内の銅鐸破片を出土した遺跡からは、鋳造関連遺構や遺物の出土はないし、数も1遺跡1点という状況ではこの説については肯定し難い。この点については全国的な銅鐸破片の出土状況について少し触れ考えてみたい。

銅鐸の破片については、三重県の服部芳人氏が破片銅鐸として完形品に近いものや後世に壊された銅鐸とは切り離して精力的に集成を行っている（服部芳人 2001、以下破片銅鐸と称する）。服部氏のご教示によると、破片銅鐸の出土例は2002年度末時点で集成したものは26遺跡31例となる（服部芳人 2002）。その後判明したものととしては掛之上遺跡で近畿式の突線鈕3式銅鐸、鳥取県宍道谷上寺地遺跡での追加例として扁平鈕式銅鐸の釦1点、高知県西分増井遺跡で扁平鈕式銅鐸の鈕1点が出土していることから、28遺跡34例となり、愛知県渥美町橘遺跡の2点が埋納品と思われる出土状況を示す以外ほとんどは集落内からの出土である。数としては近年の大規模な発掘調査で急激に出土例が増加し、一定量の出土が確認されるようになってきたため、集落内で使っていた銅鐸の破損品が廃棄されたものとは考えられない。また、静岡県下の例からは銅製品製作に対する素材とは考えられないし、銅鐸分布圏外の藤井原・段遺跡以外で垂飾品に再加工された例がないことから見ると、破片銅鐸の全てが装飾品などの再利用目的になるものとは考えられない。以下、破片銅鐸のもつ意味について分布や部位の検討からその用途について更に考えてみたい。

破片銅鐸の分布状況は東限では長野県松本市宮瀬遺跡で三遠式で突線鈕3式銅鐸の鈕部分、静岡県藤井原・段遺跡で近畿式の突線鈕4～5式の飾耳部分、西限では島根県西川津遺跡で外縁付鈕2式～扁平鈕1式の鐸身上半部分、高知県西分増井遺跡で扁平鈕式銅鐸の鈕部分が出土していることが確認できる。静岡県の藤井原・段遺跡以外、概ね銅鐸分布圏内から出土していることがわかる。また、銅鐸の該当時期から見ると外縁付鈕1式銅鐸以前のものはなく、三重県以西で外縁付鈕2式～扁平鈕式銅鐸と突線鈕式銅鐸が出土しているのに対して、愛知県以東では突線鈕式銅鐸のみが出土している。破片銅鐸の型式からは、とくに突線鈕式については長野県宮瀬遺跡が三遠式である以外、ほぼ近畿式に限られるようである。破片銅鐸の型式から出現時期を考えると、銅鐸が「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ変化する時期、「見る銅鐸」が廃棄される時期に破片銅鐸が出現していると理解される。つまり、銅鐸が埋納・廃棄される2時期の局面で破片銅鐸が出現したとも考えられるのである。

これらの状況から破片銅鐸の性格を考えると、とくに近畿式に破片銅鐸が多いことについては、近畿式銅鐸の分布圏が三遠式銅鐸の分布圏より広く製作数も多いということもあるが、破片銅鐸の突線鈕式銅鐸のほとんどが近畿式銅鐸ということの説明として、突線鈕式銅鐸を破砕する行為にあたり近畿式銅鐸を恣意的に選別したと考えるのが妥当であり、この点から見ても破片銅鐸が単なる銅製品を製作するための素材であったとは考えられないであろう。

破片銅鐸そのものの傾向から用途を考えると、服部氏も既に指摘しているが、破片銅鐸は、①愛知県果統遺跡の近畿式の突線鈕5式銅鐸2個体や兵庫県久保谷遺跡の近畿式の突線鈕5式銅鐸1個体のように破片化しているがほぼ1個体存在するもの、②西川津遺跡のように鐸身の半分程度残るものがあるが、③大部分は釦や飾耳、鈕や胴部破片の銅鐸のごく一部のものである。破片銅鐸を考えるうえで①がとくに注目される。すなわち銅鐸の再終末である近畿式の突線鈕5式銅鐸が廃棄にあたって、破砕されて埋納された状況が確認できるということである。すなわち、銅鐸が廃棄されるにあたり完形でほとんど埋納される行為が存在していたのに対して、まれではあるが破砕して埋納したものや、破片となった銅鐸を分配した可能性があるのではないかということである。すなわち、銅鐸祭祀の変化や終焉時にあたり、すべての銅鐸を埋納するのではなくて、一部ではあると思うが銅鐸を破砕して破片の一部を共有することにより集団の紐帯を保とうとしたのではないかと推測しておきたい。つまり、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への銅鐸祭祀の変化や、弥生時代の終末に銅鐸祭祀の終焉があり古墳時代へ新たな祭祀への移行がなされるに及び、おそらく当時の社会と人々は動揺した新たな祭祀や神の崇拜を簡単には受け入れ難い状況があり、その矛盾を少しでも緩和させるために破片銅鐸が使われたのではないかと考えたいのであるが、いかがなものだろうか。ただし、佐原真氏の指摘のように（佐原真 1996）、弥生時代に銅鐸を積極的に壊したとするための証明もかなり難しいものがあり、この点からも破片銅鐸の評価が分かれるところとなろう。今後の類例の増加をまちたい。

以上のように区画道路関連の調査は、道路幅という狭く限られた面積の調査ではあったが、掛之上遺跡の弥生～奈良時代の集落の様相を知るうえで欠くことのできない資料を得ることができた。また、遺物からも銅鐸の破片が出土し、銅鐸分布圏の東限の問題ばかりでなく、破片銅鐸のもつ用途や意味についても問題点を提示することができた。このように今回の調査ではたとえ狭い面積の調査であっても、掛之上遺跡を語るうえで貴重な資料を提供してくれた。今後とも、発掘調査を進めるにあたって、区画整理関係者や地元の方々の協力を得ることが、最大の必要条件である。今後とも関係者のご理解とご協力を得られるように努力したい。

【参考文献】

- 袋井市教育委員会 1983 『掛之上遺跡Ⅱ—袋井市掛之上遺跡第2次発掘調査報告書—』
- 袋井市教育委員会 1995 「掛之上遺跡第3次調査報告」「大門遺跡Ⅴ—大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書—」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 「掛之上遺跡—平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」
- 袋井市教育委員会他 2000 「掛之上遺跡—平成11年度袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—」
- 袋井市教育委員会他 2001 「掛之上遺跡Ⅶ—袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2—」
- 袋井市教育委員会 1983 「大門遺跡—大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書—」
- 袋井市教育委員会 1988 「大門遺跡—袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書—」
- 袋井市教育委員会 1990 「大門遺跡Ⅴ—大門Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書—」
- 袋井市教育委員会 1987 「大門大塚古墳—昭和61年度基礎資料収集調査報告書—」
- 袋井市教育委員会 1993 「袋井の前方後円墳—袋井の首長墓を考える—」
- 袋井市教育委員会 1995 「坂尻遺跡—遺物・総括編—」
- 袋井市教育委員会 1996 「高尾向山遺跡Ⅱ」
- 浜松市遺跡調査会 1983 「国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報」
- 浜松市文化協会 1990 「浜松市松東遺跡」
- 沼津市教育委員会 1977 「藤井原遺跡第3次発掘調査概報」
- 大仁町教育委員会 1994 「山崎・段遺跡発掘調査報告書」
- 静岡県 1992 「静岡県史資料編3 考古3」
- 梅原末治 1927 「銅鐸の研究」 大同書店 木耳社復刻版
- 佐原 真 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系2 日本Ⅱ』 平凡社
- 佐原 真 1996 「用途・破壊?・模倣」『歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸』 講談社
- 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究6 道具と技術Ⅱ』 雄山閣
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『日本歴史1 原始・古代』 東京大学出版会
- 服部芳人 2001 「金塚遺跡・金塚横穴墓群」『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境〜四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 三重県埋蔵文化財センター
- 服部芳人 2002 「銅鐸片について」『金塚遺跡・金塚横穴墓・山村遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松井一明 1992 「考察—静岡県下における方形周溝墓の出現過程について—」『宇佐八幡神社境内遺跡』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1992 「考察—中遠地域の竪穴住居の編年の様相—」『鶴松遺跡Ⅴ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
- 松井一明 1995 「古墳時代前半期土器編年」「古墳時代後半期土器編年」『坂尻遺跡—遺物・総括編—』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1996 「高尾向山遺跡に見る弥生時代後期方形周溝墓の様相」『高尾向山遺跡Ⅱ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1998 「静岡県における方形周溝墓の埋葬主体部について—木棺を中心として—」『静岡県考古学研究』No.30 静岡県考古学会
- 松井一明 1998 「静岡県中西部の中期前半東海系土器(1)—大畑C式土器とその前後—」『縄文時代中期前半の東海系土器群』 静岡県考古学会他
- 向坂綱二 2000 「県内発見銅鐸とその特徴」『敷地西の谷遺跡出土銅鐸をめぐって』講演要旨 静岡県教育委員会他

写 真 图 版

図版 1

8=SB4

23=S Z 1 北溝

38=S Z 3 南溝

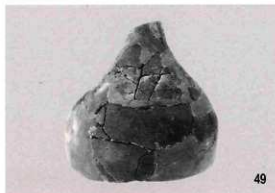
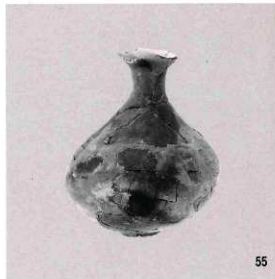
39=S Z 3 西溝

46=S Z 3 東溝

47・49=S Z 4 北溝

55=S Z 5 南溝

107=P 38



図版 2

109 = P 237

110 = P 245

111 = P 246

126・136・143 = 包含層
(土器集中1)

149・150 = 包含層
(土器集中3)

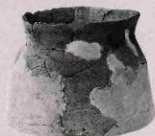
153・155 = 包含層
(土器集中4)



109



110



111



126



136



143



149



150



153



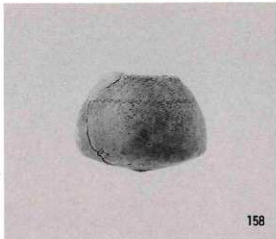
155

図版3

157・158=包含層
(土器集中5)

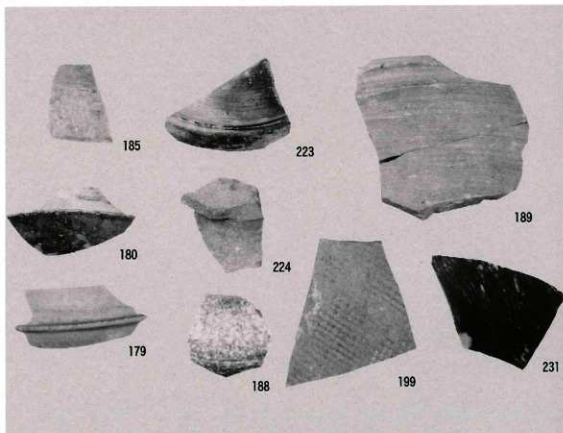


157



158

179・180・185・
188・189・199=包含層
東半分

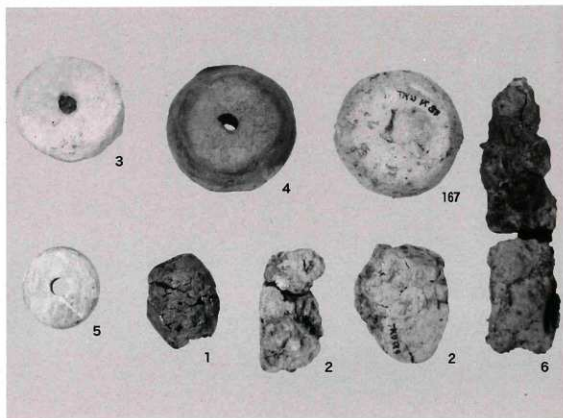


223・224・231=包含層
西半分

1・2・5・6・167=包含層
東半分

3=包含層南側

4=包含層西半分



第9次発掘調査遺物写真(3)
(土器・金属製品)

※Noは実測図Noと一致する

図版4

8 = S Z 2 北満

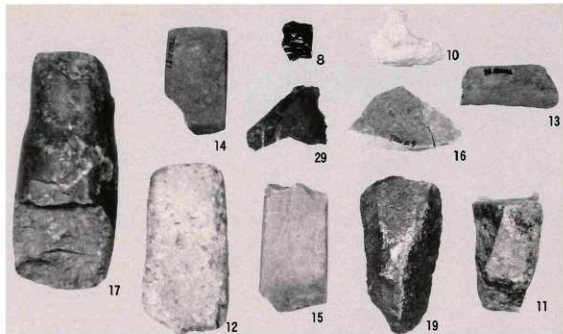
10 = S Z 4 西満

11 = S K 6

12 = P 94

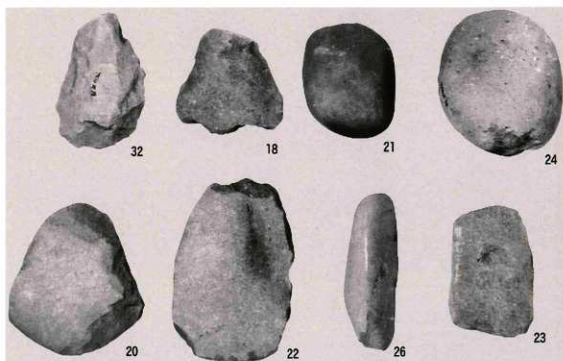
13 ~ 17 = 包含層
東半分

29 = 包含層・西半分



18 · 20 ~ 24 · 26 = 包含層
東半分

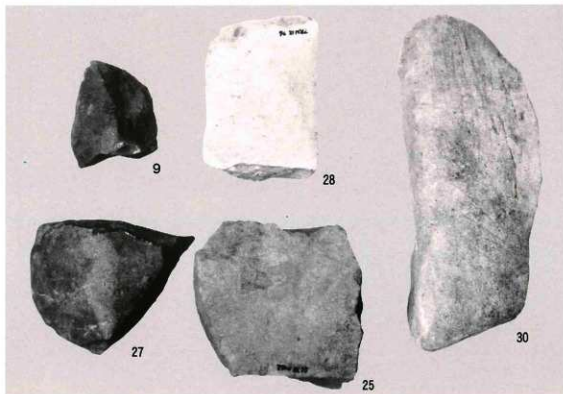
32 = 包含層西半分



9 = S Z 3 西満

25 · 27 · 28 = 包含層
東半分

30 = 包含層西半分



図版5



4



5



6



17



18

4~18=SK38



21



22



27



29



40

21~29=SK40

40=SK41

44=近代溝9

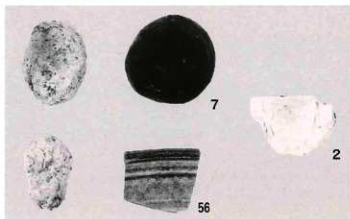
2=P30

7=SK38

56=包含層南側



44



7

2

56

第10次発掘調査遺物写真(1)
(土器・石製品)

※Noは実測図Noと一致する

報告書抄録

フリガナ	カケノウエイセキ ホンブンヘン				
書名	掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ 本文編				
副書名	袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4				
編集著者名	松井一明				
編集機関名	袋井市教育委員会				
所在地	〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1 ☎0538-44-3141				
発行年月日	2002年3月26日				
フリガナ 所収遺跡名	カケノウエイセキ 掛之上遺跡				
フリガナ 所在地	シズマカケンフタコイシチカセ 静岡県袋井市高尾				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
22216	151	34° 44' 24" 34° 44' 29"	137° 55' 53" 137° 55' 51"	20010601 ～ 20020326	590.0㎡ 袋井市駅前第二地区 土地区画整理事業に 伴う区画1号・6号 線道路建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
掛之上遺跡	集落跡	弥生時代 中・後期	竪穴住居跡 方形周溝墓 溝に囲まれた掘 立柱建物 土器廃棄上坑	土器・石器 銅鐸の破片	弥生時代中 期大方形周 溝墓群 近畿式銅鐸 破片出土
		古墳時代 前～後期	竪穴住居跡 掘立柱建物 方形周溝墓 柱穴多数	土器（土師器・須 恵器）	古墳時代後 期大集落 （豪族居館 跡）
		奈良時代 近世	掘立柱建物 屋敷地割溝	須恵器 陶磁器	郡衙推定遺 跡正倉跡

袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4

掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ

— 本文編 —

発行年月日 2002年3月26日

編集・発行 袋井市教育委員会

袋井市役所建設経済部区画整理課

〒437-8666 静岡県袋井市新屋1-1-1

印刷 松本印刷株式会社

〒437-0022 静岡県袋井市方丈3丁目3-11